

國語讀本別記 全

081607-000-7

810.78-U175k2(t)

国語読本別記

上田 万年/著

M42

DAC-6366



28
810.78
U175k2
M

明治四十二年三月二十七日
文部省檢定
師範學校・中學校・高等女學校・國語教科書

文學博士上田萬年著

國語讀本別記

東京大日本圖書株式會社

國立國會圖書館
197.22

336436

810.77
U175
(7)

國語讀本別記 緒言

一、讀本の中に國語學上の事項を多く編入するときは、文學的趣味を減じ、且つその事項も散漫となりて、學習に便ならざるが故に、別にこの書に於て、中等教育程度に於て授け置きたき國語學上の事項を列舉し、簡明に之が説明を加へたり。

一、この書は、一定の學年に配當し置かざれども、必要を認めたる時期に、讀本に併用して之を教授し、且つ常に之を參考せしむるを宜しとす。

一、この書は、教授上の都合により、篇章の順序を變更し、又は或箇所を省略して教授するも妨なし。

緒言

一、この書の引例は、多く予の讀本の中より採れり。
 一、第七篇文體の例は、予の讀本の中に入らざるものを採り、且つ讀本に缺きたる上古文と中古文との例を稍多く採れり。第八篇歌體の例も、古きものは予の讀本に入らざるもの多し。これ讀本と相待ちて國文學史上の思想を授くるに使せんがためなり。
 一、變體假名交りの文及び歌を讀み慣れしめんが爲に、特に第七篇中の古文の例及び第八篇歌體の例に之を交へ置けるものあり。
 一、この書は、作文の上にも参考せしむるを宜しとす。

明治四十一年十一月 文學博士 上田 萬年

國語讀本別記 目次

第一篇 假名 一頁

第一章 假名の發達 一

文字の種類 漢字の傳來 萬葉假名 片假名並に平假名の發生
 及び漢字との併用

第二章 現行の假名 四

假名の正體及び別體 片假名の表 平假名の表 假名の合字
 長音符 促音符 拗音符 國音になき西洋語音をうつす例

第二篇 漢字 一三

第一章 漢字の性質 一三

漢字の組立 象形指事會意諧聲 漢字の字數 轉注と假借

第二章 漢字の字體……………一五

字體の變遷 現行の字體 正體と別體 用ふるも妨なき別體の表 相似字

第三章 漢字の音訓……………二八

字音と字訓 吳音漢音唐音 吳音と漢音と異なる例の對照 義異なる爲に音かはる例 正訓と意訓 音訓種々の讀みある例 我國と支那と字義の異なる例 我國に於ける特種の假借の例 和字の讀み

第三篇 送假名……………三六

送假名の必要 國語調査委員會送假名法の四綱領

第四篇 分別書法及び句讀法……………三九

我國に於ける分別書法 分別書法の目的 分別書法の例 句讀法の目的 普通教育に用ひらるゝ句讀法の符號 符號の用例

第五篇 假名遣……………四六

假名遣の由來 假名遣に於ける三種の主義(歴史的假名遣表音的假名遣合理的假名遣) 語彙より見たる假名遣の區分(國語假名遣字音假名遣外國語假名遣)

第六篇 修辭法……………五〇

第一章 文章と修辭……………五〇

修辭研究の目的 文章の美質とすべき條目

第二章 修辭の方法……………五三

明喩 暗喩 擬人 諷喩 提喩 換喩 現寫 誇張 引用 對句 漸層 警語 設問 反語 倒置 感嘆 反覆 省略 掛詞 緣語 枕詞 句拍子

第七篇 文體……………七二

第一章 古文及び擬古文……………七二

古文の三大時期(上古文中古文近古文) 上古文の例(古事記祝詞宣命) 中古文の例(竹取物語伊勢物語土佐日記源氏物語枕の草子大鏡) 近古文の例(保元物語十六夜日記方丈記徒然草) 擬古文及び其例

第二章 近世文及び現代文……………一〇七

近世文及び其例 現代文の種類(普通文候文口語文) 普通文の例 候文の由來 口語文と標準語 口語文の二種(常體と敬體)

第八篇 歌 體……………一二〇

韻文と律格 長歌の例 短歌の例 旋頭歌の例 今様の例 連歌の例 俳句の例 新體詩の例 字あまりの事

第九篇 國語史の概略……………一四二

大和の言葉 京都の言葉 關東の言葉 江戸の言葉 帝國語

第十篇 國語學の大要……………一四八

中古語と帝國語との比較 帝國語と方言區域
第一期及び其研究 第二期及び其研究 第三期及び其研究 第四期及び其研究 第五期及び其研究

(目次終)

國語は、
皇室の藩屏なり、
國民の慈母なり。

國語讀本別記

文學博士



著

第一篇 假名

第一章 假名の發達

古今世界の諸文字は、その種類甚だ多しといへども、その性質上より、凡そ之を表意文字と表音文字との二類に大別することを得。古代埃及人の用ひたる繪文字、支那及びその隣國に行はるゝ漢字等は、表意文字にして、我國の假名、西洋諸國に用ひらるゝローマ字等は、表音文字なり。

▲夜の象形

★星の象形

☾ 天の象形

▲ 山の象形

我國の假名は、もと漢字より作り出されたるものなり。蓋し三韓交通以來漢字すでに我國に傳はり、應神天皇の御代に百濟より典籍を獻じ、學者を遣はしてより、文教漸く起れり。推古天皇の御代よりは唐土との交通開けたれば、漢學隆盛となり漢文大に行はれ、以て奈良朝及び平安朝前半期に於ける漢學の盛況を致せり。

然れども我國人が能くその思想を顯はさんとするには、適當なる漢字漢語を用ふること甚だ難く、且つ國語をそのままに寫す文章に於ては、漢文の用字法に従ふを得ざることあり。これが爲に古事記萬葉集等の中には、「伊豫・筑紫・讚岐」等の如く字音を用ひ或は「不盡能高嶺」等の如く字訓をも併せ

用ふるの便を開けり。之を萬葉假名と稱す。

萬葉假名を用ふるは便は便なりといへども、漢文にて書くよりは甚だ多くの字數を用ひざるべからざる不便あり。殊に人智開けて文筆を要すること漸く多くなるに従ひて、その煩に堪へざるに至りたれば、奈良朝の頃より、筆記に従事せし者等自然に漢字を略筆して、「阿」を「ア」、「伊」を「イ」、「宇」を「ウ」と書き、遂に片假名を發明するに至れり。片假名とは、漢字の一片を取りたる故に名づけたり。又一方に於ては、速寫の便のために盛に草書を用ひて、「以呂波」を「以呂波」と書き、その草書漸く變化して遂に平安朝の初期に至りては、「いろは」の如き平假名となれるなり。平假名とは、漢字を極めて平易簡略な

る草書とせし故に、名づけたるなり。而して平安朝の中頃よりして、少しの漢字に多くの假名を交へて和歌國文をしるすの風盛に起れり。次に鎌倉時代に和漢混淆文行はれてより、國文に漢字と假名と何れも多く併用する風起りて現代に至れり。

第二章 現行の假名

片假名も平假名も、もと誰の發明といふことなく、自然に漢字より發達し來りたるものなれば、例へば片假名の「ホ」の字の如きも、保の字より出でて、或は「呆尔早宁」などとも書かれ、平假名の「く」の字の如きも、「久九具」などの草體なる「くゝ」な

*片假名は吉備
眞備平假名は
弘法大師の作
なりといふ説
あり然れども
一人一代の作
にはあらず

どとも書かれたるものなり。然るに後世漸く淘汰せられて、一定せんとする傾向となり、遂に片假名の如きは僅に一二の別體のみ残ることとなり。平假名の如きも、現今活版所常用のものは、略一定せらるゝに至れり。然れども平假名の別體即ち變體假名と呼ばれるものは、「無用此者入る菴うらべ」の如く、なほ世に用ひらるゝもの尠からず。故に今後の人の書くとしては、一定すること望ましけれど、從來の書籍又は他人の手書を讀むためには、別體の假名をも知りおくべきなり。左の表に示す同音の假名の中にて、上なるは、現今の標準的の假名にして、その下なるは、今も用ふることある變體假名なり。

○片假名

ア	イ	ウ	エ	オ
カ	キ	ク	ケ	コ
サ	シ	ス	セ	ソ
タ	チ	ツ	テ	ト
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
マ	ミ	ム	メ	モ
ヤ	イ	ユ	エ	ヨ

ラ	リ	ル	レ	ロ
ワ	ヰ	ヱ	ヰ	ヲ
ン				

○平假名及び變體假名

い	ろ	は	に	ほ
へ	と	ち	り	ぬ
る	を	わ	か	よ
た	れ	そ	つ	ね
な	ら	む	り	る

色紙短冊等
には通點を
つ
けざる例なり

左に變體假名を交へて書ける例を示さん

の乃々	おれ	くくき	やを	ままは
け々	ふぬ	こみ	えに	てて
ああ	ささ	きた	ゆを	めえ
みま	しし	ゑゑ	ひを	もも
せせ	すす	ん		

本居宣長

茂更く小阿そふいとまき有る人々

いとまなしとてぬみよほぬる

伴資芳

走る川ひに海なるるき山まつを

志はし木の葉の下くゝるあま

橘守部

飛鳥川あすとひひてそならしやる

月日にかゝるまらみろなき

又假名を速書する便利のために合字を生じたり、筆記等に見る所なり。その普通に行はるゝもの左の如し。

エト||一

トモ||氏

トキ||片

こと||と

なり||之

より||か

同じ假名を一字又は二字以上重ねて記すに代用する符號あり。即ち「ツ」、「ヤ」、「ガラ」、「なほ」、「くりかへし」の

類なり。この符號を踊字をどりじと呼ぶ。

假名に交ふる符號に長音符・促音符・拗音符と呼ぶものあり。左の例の如し。

長音符 片假名にも平假名にも謂はゆる棒を用ふ。

ローマ ビスマーク ホーホケキョー(驚の聲)

ろーま びすまーく ほーほけきょー

促音符 片假名に交ふるには「ッ」平假名に交ふるに

は「つ」の字體を借りて、之を前後の字より小さく右側によせて書く。但し、前後の字と同じ大きさにて直下に書けるもあり。

キッブ アッパレ

きっぶ あっぱれ

拗音符 片假名に交ふるには「ヤ・ユ・ヨ」平假名に交ゆる

には「や・ゆ・よ」の字體を借りて、之を前後の字より小さく右側によせて書く。但し、前後の字と同じ大きさにて直下に書けるもあり。

チャワン シュズミ リョヒ

ちやわん しゅずみ りょひ

なほ國音になき西洋の語音をうつすに左の例の如くするものあり。

ヴァンクーパー(北米の港) ヴィクトル、ユーゴー(佛國の文學者)

ヴェニス(伊國の港) ウィーン(奥國の都)

ウエリントン(英國の名將)

フィロソフィー(哲學の原語)

第二篇 漢字

第一章 漢字の性質

漢字は本來一言を一字とする表意文字にして、表意文字としては、最も能く發達したるものなり。漢字の組立を類別すれば、左の四種となる。

象形 「日・月・山・川・口・目・魚・鳥」の諸文字の如く、物の形を象りたるもの。

指事 「一・二・三・上・中・下」の諸文字の如く、形に依りて事を指したるもの。

會意 「日」と「月」とを合せて「明」の字を作り、「口」と「鳥」とを

合せて「鳴」の字を作るが如く、象形もしくは指事の文字を合せ、その意を會して別義を表はすもの。

諧聲 「伯・拍・柏・泊」等の諸文字の如く、その合字たることは會意に似たれども、その一部分はその字の概念

を表はし、他の一部分はその字の聲音を表はすもの。

説文解字に掲げたる漢字は、すべて九千三百五十三字、康熙字典に載せたる漢字は、すべて四萬二千一百七十四字の多きに達せり。漢字は形體の變遷したるために、一々所屬の分明ならざるものも有れども、概して指事最も少なく、象形會意は稍多し。而して諧聲は最も多くして、凡そ全數の十分の九を占む。

聲を表はす部分の位置に右左上下内外等の別あり例へば
(右) 性銅
(左) 頭鴻
(上) 忠貨
(下) 花界
(内) 固間
(外) 間衛

康熙字典及び補遺備考に收めたるものまで合すれば四萬八千六百四十一字となる

これは支那の例なり我國にては英佛露獨米と書く

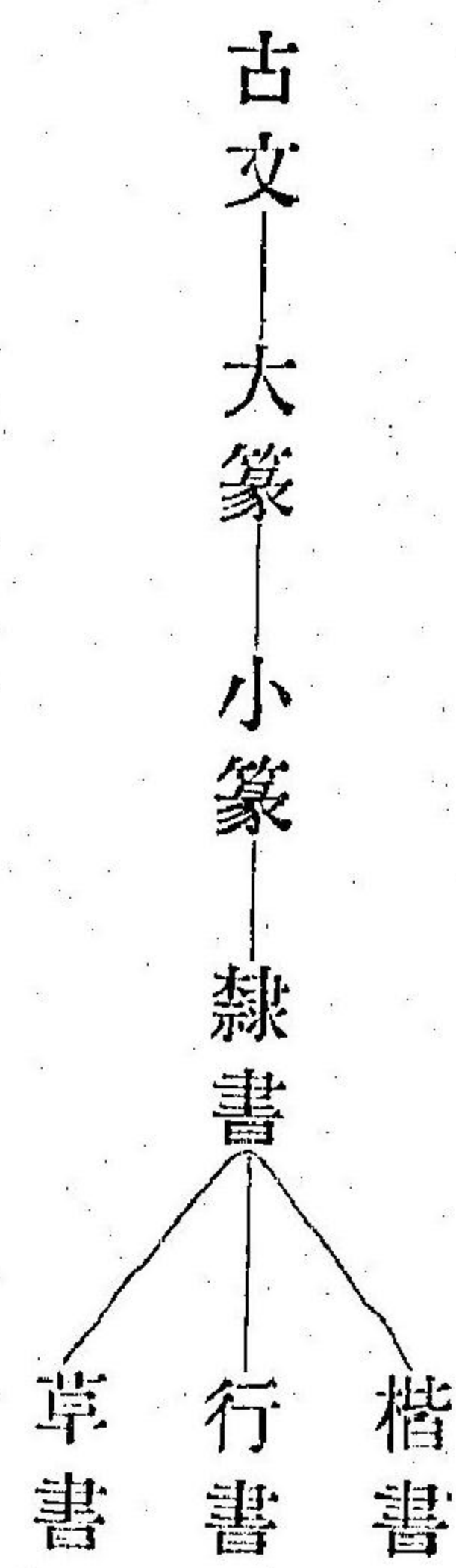
假借は古くより支那に行はれたり例へば「豆」はもと器物の名なるを「まめ」の義に借用せるが如き是なり我假名も假借より起れるなり

なほ漢字を用ふる上には、「樂」の字はもと「音樂」の義なるを、轉じて「快樂」等の義にも用ひ、「上」の字はもと「上」の義なるを、轉じて「主上・献上」等の義にも用ふるが如く、字義を轉用すること多し、之を轉注と呼ぶ。又「英・法・俄・特・美」の如く、單に字音を假りて用ふることもあり、之を假借と呼ぶ。支那にては以上の象形・指事・會意・諧聲・轉注・假借を總稱して六書と云へり。

第二章 漢字の字體

漢字の創製ありしよりこのかた、已に數千年以上を經過し、その字體は次第に變遷して、古と今と大いに異なる所あり。その變遷は、凡そ古文・大篆・小篆・隸書・楷書・行書・草書等に別つ

べし。左に字體變遷の大略を示すべし。



古文	下	上	水	山
大篆	下	上	水	山
小篆	下	上	水	山
隸書	下	上	水	山
楷書	下	上	水	山
行書	下	上	水	山
草書	下	上	水	山

古文は殆ど圖畫に類せり漆液を以て木竹に書したれば、頭圓大にして尾細く、その形蝌蚪に似たり、故に蝌蚪の文とも云ふ。周の代に古文によりて篆書作られ、秦の代に更に篆書の改良あり。世に周篆を大篆、秦篆を小篆と呼ぶ。秦の代に又更に小篆の字畫を簡便にして隸書を作る。漢の代以後隸書よりして更に楷行草の三體作られ、書體いよゝ簡便となり、この三體長く常用の書となれり。而して篆書と隸書とは印璽碑題等に用ひらる。

漢字の字畫は、即ちその綴字法なれば、その字畫を正しくせざるべからず。楷書に於て殊に然りとす。但し、その正體の外に、廣く世に行はるゝ別體あり。左に國語調査委員會に於て

「京」を「京」
「揚」を「揚」と
書くが如く正
體よりも字畫
の多き別體は
用ひざるを宜
しとす

別體を用ふるも妨なしとせる漢字を示すべし。
(一) 左の如き文字は、上段に擧げたる別體を用ふるも妨なし。

禮 仏 劍 厩 画 後 万 岳 竜	別體
禮 佛 劍 歷 畫 篠 萬 嶽 龍	正體
廟 兒 号 処 与 欵 尔 糸 並	別體
廟 貌 號 處 與 歟 爾 絲 並	正體

竜滝筆

龍瀧筆

途跡筆

邇彌筆

錢 弄 塩 双 声 岩 斷 肅 辭 躰 麦	繼 蕭繡 亂
鐵 棄 鹽 雙 聲 巖 斷 肅 辭 躰 麥	繼 蕭繡 亂
糧 虫 即 灯 関 獻 屬 密 躬 窮 毘 繩 蠅	囑囑 蜜
糧 蟲 卽 燈 關 獻 屬 密 躬 窮 毘 繩 蠅	囑囑 蜜

別體	盡 眊 攬 攬 覽 覽 為 為 偽 偽 參 參 從 從 將 將 淋 淋 狀 狀 獎 獎 醬 醬	正體	盡 盡 攬 攬 覽 覽 為 為 偽 偽 參 參 從 從 將 將 淋 淋 狀 狀 獎 獎 醬 醬	別體	真 真 慎 慎 慎 慎 鎮 鎮 顛 顛 粘 粘 玆 玆 却 却 脚 脚 旧 旧 舅 舅 惡 惡 唾 唾 宝 宝 鬱 鬱 踪 踪	正體	真 真 慎 慎 慎 慎 鎮 鎮 顛 顛 粘 粘 玆 玆 却 却 脚 脚 舊 舊 舅 舅 惡 惡 唾 唾 寶 寶 鬱 鬱 蹤 蹤
----	--	----	--	----	--	----	--

元は同字なれども字體を異にせるを以て用例も亦異なるものあり例へば「著」(著述など)と「著」(着物など)「箇」(箇條など)と「個」(個人など)との如き是なり

徑	壯 壯 藏 藏 經 經 徑 徑 頸 頸 勁 勁 莖 莖	徑	壯 壯 莊 莊 藏 藏 經 經 徑 徑 頸 頸 勁 勁 莖 莖	麗 麗 顛 顛 儷 儷	麗 麗 顛 顛 儷 儷
---	---	---	--	-------------------	-------------------

(二)左の別體と正體とは、元は別種の文字にて、關係なきものなれども、通用の廣く且つ久しきものなれば、別體を用ふるも妨なし。

別體	証 証 (諫む) 胆 胆 (肥えたる貌) 担 担 (撃つ)	正體	證 證 證據 膽 膽 肝膽 擔 擔 負擔	別體	豊 豊 (禮を行ふ器) 托 托 (拓と同じ) 医 医 (弓矢を盛る器)	正體	豐 豐 豐饒 託 託 委託 醫 醫 醫術
----	--	----	-------------------------------------	----	--	----	-------------------------------------

(三)左の別體は、物の數量を記す時に限りて用ふるも妨なし。

匣	圓	別體
釐	圓	正體
𦵏	丁	別體
錢	町	正體

(四)文字の偏旁冠脚を變換して書することあり。されども變換して妨なきものあり。又變換して別字となれるものあれば、妄に爲すべきにあらず。

羣	獨	松	嶮	和	正體
群	獸	杏	崙	味	別體
胷	略	棊	岷	峨	正體
胸	畧	棋	崑	峩	別體
蘇	秋	稟	幕	峯	正體
蘓	秋	稿	幙	峰	別體
𧈧	稟	槩	摸	𡵓	正體
𧈧	稿	概	摹	崖	別體

鶩	鄰	鞞
鵝	隣	鞍
	鞞	
	鞞	
	魂	
	蒐	
	魄	
	鬼	

右は變換するも妨なきものなり。

この中に幕と幙とは同一にて、帷幕は帷幙と書すれども、幕府は幙府と書することなきが如き、特殊の慣例あるものあり。

悱	憤悱	悲	悲哀	紋	紋章	素	素亂	棘	いばら	棗	なつめ
愉	愉快	愈	平愈	翊	輔翊	翌	翌日	腑	臟腑	腐	腐敗
斲	うてき	桀	しをり	拾	ひろふ	拿	拏の俗字	擗	胸をうつ	擘	大指
盱	おそし	早	ひてり	衿	えり	衾	ふすま	怡	よろこぶ	怠	怠惰
猶	なほ	猷	はかりごと	眇	すがめ	省	かへりみる	吟	吟詠	含	ふくむ

右は變換すれば別字となるものなり。

普通に誤り易きものを掲げおく

音は「てき」とよみ「もと」「あしあと」等と訓ず「摘摘」歎「適適」等之に従ふ

猶と猷とは、古書には通用せしものなれども、今日普通には各別に用ふることゝなれり。又相似字と呼び、別字にして字體相類似する文字あり。明らかに之を區別して書せざるべからず。

修 商 摸 撰 班 師 歐

脩 商^ニ 模 選 斑 帥 毆

佳 丞

烝 蒸

佳 亟

極

罔

網

罔

剛綱鋼

求

救 毬

朮

術述

白

略 炤 詔 陷

白

滔 稻 蹈

段

假 暇 瑕 蝦 霞 鍛

段

鍛

麻（い） 疥（い） 疥（い）

傘

峯 烽 縫 蜂 鋒 鋒 逢

傘

降

麻

摩 磨 魔 痲（い）

林

焚 禁 痲（い）

東

凍 棟

東

煉 練 諫 欄 蘭

且

祖 租 狙 粗 組

旦

但 坦 韃

于

宇 迂

干

刊 奸 旱 汗 竿 軒 幹

專

專

小

傅 博 搏 簿 薄 縛

水

傳 團 轉

忝 添 恭 慕

泰 暴 瀑 漆 黍 藤

易

場 賜 錫

易

傷 場 揚 楊 湯 腸 陽

東

勅 刺 喇 速 整 賴 瀨

東

刺 棗 棘 策

己（一）

母（四） 己（二）

戊（七）

戊（八）

戊（九）

母（六） 己（三） 戊（一〇）

辨（辨別）

辦（辦理）

瓣（花瓣）

辯（辯論）

辯（辯士）

* 名詞
（一）おのれ
つちのと
（二）すてに
（三）み
（四）はし
（五）なかれ
（六）つらぬく
（七）つちのえ
（八）いぬ
（九）ましろ
（一〇）の

第三章 漢字の音訓

我國にて漢字をよむに、字音と字訓との別あり。字音即ち音とは、古の支那語音に基づくものにして、「山川・靜動・善惡」を「さん・せん・せい・どう・ぜん・あく」とよむ類なり。字訓即ち訓とは、之を我國語に譯したるものにして、「やま・かは・しづ・かう・ごく・よし・あし」とよむ類なり。而して支那語音傳來の時代及び地方の異なるによりて、吳音・漢音・唐音等の別を生じたり。例へば

(吳音)	行者 <small>ぎやうじや</small>	起請文 <small>きじやうもん</small>	京都 <small>きやうと</small>
(漢音)	孝行 <small>かうかう</small>	請願 <small>じやうがん</small>	京師 <small>きやうし</small>
(唐音)	行在所 <small>ぎやうざいじよ</small>	普請 <small>ふじやう</small>	南京 <small>なんきやう</small>

の如き、是なり。蓋し當初六朝及び唐朝の頃、支那南方の音を傳へたるを吳音といひ、北方の音を傳へたるを漢音といひ、後世宋元の頃の音を傳へたるを唐音と呼べるなるべし。然れども字ごとに皆三音あるにあらず、唐音によむ字は稀にして、又吳音と漢音と同一によむ字も多しと知るべし。左に吳音と漢音と異なる例を擧げて對照せん。

(吳音)	佛經 <small>ぶつぎやう</small>	經文 <small>ぎやうもん</small>	法會 <small>ほふゑ</small>	衆生 <small>しゆじやう</small>	煩惱 <small>ぼんごう</small>
(漢音)	經典 <small>きやうげん</small>	文學 <small>ぶんがく</small>	會社 <small>ゑいしや</small>	生物 <small>せいぶつ</small>	煩悶 <small>ぼんもん</small>
建立 <small>けんりつ</small>	居士 <small>こじ</small>	成佛 <small>じやうぶつ</small>	校合 <small>けうがふ</small>	出家 <small>しやうけ</small>	流罪 <small>りうざい</small>
建築 <small>けんちく</small>	居住 <small>きよじゆ</small>	成功 <small>せいこう</small>	校閱 <small>けうえん</small>	家屋 <small>かおく</small>	流儀 <small>りうぎ</small>

元日 <small>げんじつ</small>	口傳 <small>くつわん</small>	殺生 <small>ころしやう</small>	病氣 <small>びやうき</small>	行儀 <small>ぎやうぎ</small>	四品 <small>しひん</small>
元氣 <small>げんき</small>	口上 <small>くつじやう</small>	自殺 <small>じそく</small>	疾病 <small>しやうび</small>	品行 <small>ひんかう</small>	品位 <small>ひんひ</small>

版圖 <small>ばんと</small>	損益 <small>そんえき</small>
圖畫 <small>ずゐ</small>	利益 <small>りやく</small>

古より大概佛典には吳音を用ひ、漢籍には漢音を用ひたり。従つて佛教の勢力に由來せる通俗語には吳音行はれ、漢學の素養ある人の影響を受けたる近世及び現代の漢語には、漢音行はるゝなり。

更に又一字の音にして義變ずるがために、音のかはることあり。例へば「樂」の字を禮樂の義なれば、樂がくとよみ、快樂、樂天等

の義なれば、樂がくとよみ、又「出」の字を出入の義にて自動詞なれば、出しゅつとよみ、出師即ち師を出すの義にて他動詞なれば、出しゅつとよむが如き、是なり。尙この類の例を擧げて對照せん。

讀書 <small>とくしゆ</small>	ふみをよむこと	善惡 <small>ぜんあく</small>	よしあし	利率 <small>りそつ</small>	利息のほ	程度 <small>ていど</small>	ほどあひ
句讀 <small>くたう</small>	よみきり	好惡 <small>かうあく</small>	このむとにくむと	引率 <small>いんそつ</small>	ひきゐる	忖度 <small>そんたふ</small>	はかる

數學 <small>すうがく</small>	かずの學問	轉覆 <small>てんぷく</small>	くつがへ	切斷 <small>せつだん</small>	きりたつ
頻數 <small>ひんすう</small>	しばしば	覆天 <small>ふてん</small>	おほへる	一切 <small>いっけつ</small>	すべて

訓には山川さんせんの如く一字一訓なるもあり、又菊鉢きくはちの如く單に字音のみにて通用するものありといへども、一字にして意

義の異なるがために、幾多の字訓あるものあり。例へば「復」の字を「また」「かへる」などとよみ、「上」の字を「かみ」「うへ」「あがる」「あぐ」のほる、「のほす」「たてまつる」などとよむが如き、是なり。而して訓に正訓と意訓とあり。

(正訓) 山 川 草 木 人 馬 筆 紙 上 下
往 來 白 黒 又 甚 刷 毛 加之 など

(西洋語にてよむ) 隧道 燐寸 唧筒 麵包 なども一種の正訓とすべし

(意訓) 七夕 流石 草臥 五月蠅し など

(飛鳥春日などは特種の意訓とすべきか)

同じき漢字の熟字にして、そのよみ方の異なるによりて、意

* 上古に飛鳥の明日香春日の加須賀といひたる其枕詞の字を直ちに地名に當てよみたるなり

義も亦異なるものあり。その例左の如し。

(音讀二稱) 工夫 丈夫 利益

(訓讀二種) 端書 手向 預主

(音讀と訓讀) 一切 御前 讀書

(音讀もしくは訓讀と音訓混讀) 讀本 出立

尙本邦の通例の意義にして、甚しく支那のと異なるものあり。その例左の如し。

萩 榎 沖 咄

よもぎ ひたぎ ひなし、ふかし しかる (支那)

はぎ えのき ちぎ はなし (日本)

更に漢字の音又は訓を假借して國語をうつす一種の用法

あり。例へば「申吳候床し。天晴申斐なし。仕舞頼母數丁。度兎角中々矢張目出度」などの如き是なり。
 又和字と呼び漢字に倣ひて我國にて作りたるものあり。されば支那の字書には之なし。和字には凡そ訓ありて音なし。その例左の如し。

「動」と音に
よむことある
は「動」の音の
うつれるなり

- | | |
|-------------------|-------------------|
| 働 はたらく(人動く) | 凧 こがらし(風木を吹く) |
| 峠 たうげ(山の上り下る處) | 樫 かし(堅き木) |
| 榊 さかき(神事に用ふる木) | 畑 はた(草をやきて種まく田) |
| 島 はたけ、はた(白く乾きたる田) | 糶 かうち(米の花の如くなるもの) |
| 羨 しつけ(身を羨くす) | 込 こむ(送り入る) |
| 辻 つぢ(十の字の如き道) | 鑽 やり(金の突き遣るもの) |

差附

- | | |
|----------------|--------------|
| 問 つかへ(門の中に山あり) | 鱒 たら(雪の頃の魚) |
| 鰯 いわし(弱き魚) | 鳴 しぎ(田に居る鳥) |
| 黍 くめ(久米の二合字) | 磨 まろ(麻呂の二合字) |

我國に行はるゝ漢字は數千を下らず、この數千の漢字を意義に應じ、習慣に従ひて、正しく読み書きすることは、實に容易の事にあらず。されば漢字交り文を書くに當りて、讀みにくき漢字を用ひざること、漢字の用ひ方の不安心なる場合には、假名を利用せんこと、甚だ望ましきことならずや。

第三篇 送假名

我國の文字の如く漢字及び假名を併用するものにおいて
 は、漢字が音にて讀まるゝか、又訓にてよまるゝか、又同じ訓
 にても「上^ち上^ちぐる上^あ上^あつる」の如く數種の訓によみ得ら
 るゝ場合ある時に、送假名によりて之を讀み分けしむる必
 要あり。送假名は始め漢文に施されたる「^{*}ヲエト點」などより
 漸々發達し來りたるものなり。古來助假名棄假名など呼ぶ
 ものも同義に用ひられたること多し。

送假名法の最も早く制定實行せられたるは、官報局のもの
 なるべし。然れどもこれとても未だ國民的のものにはあら

^{*}「テニナハ」と
 云ふが如し

ず、近く國語調査委員會にて制定せるものあれども、未だ普
 く世の用ふる所とならざるが如し。同會送假名法の四綱領
 は左の如し。

一、活用語の語尾變化をかきあらはすこと。

〔例〕 動く 動かす 樂し 樂しく遊ぶ 樂しむ

疑はし 語らふ 流れ出づ 聞きに行く

食はず嫌

二、語の末に附屬する助詞助動詞をかきあらはすこと。

〔例〕 誠に 豫て 元より 春めく 赤らむ

静けし 横たはる

三、語の末に含まるゝ接尾語をかきあらはすこと。

〔例〕 甘み 快さ 憎げ 一つ 九つ

四、漢字を音讀せるものは漢字以外をかきあらはすこと。

〔例〕 決す 決して 達し 仕損じ 明白に

美麗なり 巍然たり

第四篇 分別書法及び句讀法

分別書法は、西洋の文章にては非常に重要なるものなれども、我國にては未だ充分その必要を認められず。蓋し因襲の久しき、多く漢字を用ひて之を補ふに假名を以てし、かつ活版の體裁等に於て種々改正の困難あるべければなり。故に分別書法は、今日にては主として小學校用の讀本^{*}にのみ行はる。分別書法は、名詞・動詞・形容詞等、品詞を分別して書くが故に、理解を容易にし思想の表現を明確にする利益あり。然れどもローマ字文等に分別書法を用ふる時は體裁よけれども、漢字假名併用文等に之を用ふる時は、盆の上に豆粒を

^{*}明治三十七年
文部省著作現
行の尋常小學
讀本には卷四
までに之を用
ひたり

散布せるが如き觀ありて、體裁極めて惡し。されば我國の文章に於ては、分別書法は教育上これを用ふべきも、實用上には今日の處行はれ難し。

左に現行の尋常小學讀本に用ひたる分別書法の例を示すべし。

||は詞のつなぎの爲に用ひたる符號なり

ダンダン、アタタカニナリマシタ。ウメガサ||
キダシマシタ。
ウメノハナハ、ヨイニホヒガシマス。
ウグヒスガケサ、ウメノキデ、ホーホケ||
キョート、ナキマシタ。
サクラガサクノハユレカラデス。

ナノハナガサクノモユレカラデス。

句讀法は、文と文との關係、文中の語句節の相互の關係を明らかにするを以て目的とす。而して此目的を達せんが爲に種々の符號を使用す。この符號の用法は、未だ國民的に一定せられたるものあらざれども、現今小學校をはじめ中等教育の諸學校に於て普通に用ふる者は左の如し。

- マル
- 、 テン
- クロマル
- 「 カギ

正序^一 省略^二 倒置^三

二 フタヘカギ

マルは左の例の如く文の終止する時に施す。

吉野^一の櫻満開せり。

堂内の佛像三萬三千三百三十三體^二。

立ちかへり見れどもあかず富士^三の高嶺は。

テンは左の例の如く、文の全く終止せずして稍切る、所誤解を生じ易き所、又は文の長く連なりて讀むに便ならざる所等に施す。

鯨は魚類にあらず、獸類なり。

忠言は耳にさからひ、良薬は口に苦し。

人の過をいふこと勿れ、わが功にほこること勿れ。

我を生み、我を養ひ、我を教へたる父母。

節儉と吝嗇とは異なるが故に、之を混同すべからず。

雪いと面白く降りたる朝、帝は端近く出てさせたまひて、雪を御覽じけり。

清國の版圖内たる西藏^一は、高山その四方を圍みて、交通極めて不便なり。

高山彦九郎・蒲生君平・林子平、この三人を寛政の三奇士といふ。

この人は甚だ、高尚なる事を好めり。

秀吉、清正・行長をして先鋒たらしむ。習性^二となる

甚だは好めり^一 二野の粘着するおそれあり^二

假名の粘着するおそれあり

上野公園は五重の塔までかかる

父の教へと師の嚴と、ふたつながら、おろそかなけれども、學問の成ることなきは、子の罪なり。

上野公園の、博物館・圖書館・五重の塔。

クロマルは、左の例の如く幾つもの名詞の並列せる時に、其間に施す。

フランクリン十三箇條の徳目とは、節制・沈黙・秩序・決意・節儉・勤勞・誠實・正義・溫和・清淨・寧靜・貞操・謙遜をいふ。

カギは、左の例の如く地の文と挿入の文とを區別する爲に施す。

古歌に「身はならはしのものにぞありける」とよめる如く、いかなる事も、常のならはしによりて、いはゆる「習性

となるものなり。

フタヘカギは、左の例の如く挿入の文の中なる他の挿入の文句を區別する時に施す。

吉田松陰は「死而後已」の四字は、言簡にして意廣し。堅忍果決、確乎として抜く可からざる者、これを舍きて術無きなり」と云へり。

句讀法の事大要以上の如しといへども、讀者の誤解を生ぜざる限は、或は前例の符號を省き、又必要なる場合には、符號を増加するも妨なし。

論語の附

第五篇 假名遣

我國には古來文字なかりしかば、三韓交通の後漢字の傳來ありしより、漸次漢字を使用することとなれり。然れども純粹の日本語をそのまゝ表記する必要あり。たとへば歌地名・人名の如きは、いきほひ漢字を表音的に使用せざるべからず。これ萬葉假名の因つて起る所以なり。故に萬葉假名は主として表音的のものにして、奈良朝及び其以前の言語をそのまゝ記載したるものなり。然れども言語は時代と共に變遷する者なれば、平安朝に至りては已に奈良朝とは大いに其言語の趣を變じ、殊に平安朝以後に於ては其變遷甚だ著

したとへば古「おをほふ」大岡尾花名にしおふの如く發音極めて明瞭に區別せられたるものも、後には皆等しく「おと發音するに至れり。是に於て始めて假名遣の事攻究せらるゝに至れり。

今日の學術上に於ては假名遣の上に左の三種の主義あり。

- (一) 歴史的假名遣 此れ主として奈良朝時代の文學上の典據に基づく假名遣によるものなり。
- (二) 表音的假名遣 此れ今日各人の發音そのまゝを書きて妨なしと主張するものなり。
- (三) 合理的假名遣 此れ茲に一の標準語を規定し、その標準語の上の發音通りに書くべしと主張するものなり。

また語彙の上より區別すれば、假名遣には國語假名遣・字音假名遣及び外國語假名遣の別あり。

國語假名遣は主として和學者の主張せるものにして、歴史的假名遣の主義によるものなり、皆固有の日本語のみの綴字法に關す。これには(イ)契沖假名遣(ロ)定家假名遣(ハ)國語調査委員會假名遣の如きあり。例へば、桶の假名を(イ)にてはすべて「をけ」、(ロ)にては「おけ」、但し小桶とつゞけば「こをけ」、(ハ)にてはすべて「おけ」とかくが如き、是なり。

字音假名遣は主として我國に用ふる漢字音の綴字法に關するものにして、これには(ニ)僧文雄等の研究せる歴史的及び韻鏡的假名遣と、(ホ)文部省が明治三十三年に省令を以て制定せしことある假名遣と、(ヘ)國語調査委員會假名遣の如きあり。例へば(ニ)にては「こう公、かう高、かふ甲、こふ劫、くわう光」とかくを、(ホ)にては凡て「こー」、(ヘ)にては凡て「こう」とかくが如き是なり。

外國語假名遣に關しては未だ一定の假名遣制定せられざれども、明治三十五年文部省に於て中等教育の爲に調査せる外國地名人書き方取調の如き、最も參考すべきものなり。

第六篇 修辭法

第一章 文章と修辭

修辭とは、辭の用ひ方を善美にすることなり。之を研究する學を修辭法または美辭學といふ。いづれも英語にいはゆるレトリックの譯語なり。修辭の研究をなすは、他人の言語文章を鑑識する上にも、己が思想を最も有効に發表する上にも、必要なることなり。例へば山の高きを云ふにも、單に「高し」とのみ云はんには、平凡にして風情なけれども、之に修辭を加へて「高きかな」「豈高からずや」「天に聳ゆ」などといはゞ、聽者讀者の感甚だ深かるべし。

然れども、文章は必ずしも辭を飾るを事とすと誤解すべからず。飾るべきに飾り、飾る必要なきに飾らざるは、修辭の本意なり。例へば數學・物理・化學等の文章の如く理を主とするものは、修飾すくなく明晰にして確實なるを要し、文學の文章の如く情を主とするものは、修飾おほく含蓄ありて巧妙なるを尙ぶ。而して文學の中に於ても、韻文は概して散文よりも修飾に富むべきなり。

文章の美質として修辭學者の擧げたる所に據れば、

第一、純良なる國語を用ひざるべからず。即ち濫に古語・廢語・方言・下等語・外國語もしくは専門語等を用ふるが如きは、戒むべき事なり。

第二、慣例を誤るべからず。即ち語義語句の用例を誤り、語法の錯誤を生ずるが如きは、戒むべき事なり。

第三、精確ならざるべからず。即ち異辭同義または同辭異義にして曖昧なる語を用ふること、或は濫に語句を省略し或は冗漫ならしめ或は顛倒せしめて、文章を漠然たらしむること等は、戒むべき事なり。

第四、思想の脈絡明晰ならざるべからず。即ち前後叙する所の思想不統一なること、事物の知識不確實なること、わざと文を飾るために意を害すること等は、戒むべき事なり。

第五、文章を有力にして流暢ならしめざるべからず。即ち

濫に抽象的の言語を用ふること、叙述の平凡なること、語路難澁又は文體混淆して不調和なること等は、戒むべき事なり。

以上の諸點は、修辭上常に注意せられざるべからず。

第二章 修辭の方法

古今の佳作と稱せらるゝ文章は、何れも内容即ち思想のすぐれたると、外形即ち修辭の巧なると相待り。文章の内容、外形の美共に偏廢すべからず。今國語に於ける修辭の方法多き中につき、その著しきものを左に列舉せん。

明喩 心泰然として動かざる事を、動かざること山の如

しと云ふが如く、一事物を明らかに他の事物に比するを明
喩といふ。明喩には「如し」「似たり」「譬へば如し」「さながら似たり」
等の語あるによりて、容易にこれを知り得べし。

引例の出所一
は擧げず

○光陰矢の如し。

○蘭の花はさながら蜂に似たり。

○花は盛りに咲きにほひて、一目千本のあたり、雲の如
く雪の如し。

暗喩 一事物を他の事物と比することは、明喩に等しと
いへども、「如し」「似たり」「譬へば如し」「さながら似たり」等の語な
きによりて、その比喩たることの分明ならざるものを暗喩
といふ。例へば「袖に涙落ちて露にうるほへるが如し」と云ふ

を「袖に露おくと」いふが如きこれなり。

○股肱の臣。

○破竹の勢を以て各地を占領せり。

○教へ子の第二の親とも呼ぶべき其人なからむには、

夏草の繁みが中の撫子まで、いかでか露の恵に潤ふ
べき。

擬人 非情の者を有情にいひなすを擬人といふ。例へば
「歲月人を待たず」といふが如きこれなり。麥藁帽子の傳の如
きは、全篇擬人法を用ひたり。

○笑ふ門には福來る。

○朝顔につるべとられてもらひ水。(千代)

*井上毅子の熊
木直太郎傳の
中

○詩人は「東天皆笑ふ」の句を以て「曉光」を形容せり。
 ○流を咲き埋めたる「蓼」の花は、おのづから涼しきすみかをしめて、小川の歌をわがものとやすらん。

諷諭 意味なきものを假りて、意味ある事を諷するを諷諭といふ。例へば「燕雀何ぞ鴻鵠の志を知らんや」といひて、小人輩が大人物の心を得知らざること諷するが如き、これなり。御伽噺には「花さか爺」「舌きり雀」等の如く全體に亘りて諷諭するもの多し。

○闇中に明珠あり。闇下それを認めたまはずや。

○末つひに海となるべき山水も、しばし木の葉の下くぐるなり。(伴資芳)

英國の艦長が
 暗き艦中に御
 勤務中の有栖
 川宮威仁親王
 殿下を意味し
 て谷千城子に
 言へる語
 韓信の事を諷
 諭す

浦賀に黒船の
 來りし時の狂
 歌

○太平の眠りをさます上喜撰「蒸氣船」たつた四はいで夜もねられず。

提諭 事物の部分をあげて、その全體を指し、或はその全體をあげて、その部分に代ふるを提諭といふ。例へば「白髮の人」といひて、老人をさし、「花」といひて、花木中の王なる櫻の花を稱するが如き、これなり。

○行水のすて所なし「蟲」の聲。

○家康は「海道一の弓取」と稱せられき。

換諭 別種の事物を以て或事物の名に代へ稱するを換諭といふ。例へば「六花」といひて雪をさし、「一門」といひて同族全體をさすが如き、これなり。

金鳥玉兒
梁の孝王の故
事

○烏兔^{くうと}匆々年將に暮れんす。

○竹^{たけ}の園^の生^のの尊^をき御^を身を以て戰に臨ませ給ふ。

現寫 過去に起りし事、將來に起らんとすること、または全く想像的なる事を、今眼前にあるが如く寫し出すを現寫といふ。例へば「頼朝富士河の東に陣す。維盛夜水禽の起つを聞いて驚き走る。」と云ふが如き、これなり。

○千萬歳を經と雖も亦此の如し。

○元和元年家康薨ず。年七十五。久能山に葬る。後改めて日光山に葬る。

○「身のまはり華やかにのみなりゆくにつけては、己をも疎ましきものにして、舶來のバナナを喜べり。華奢

は文明に伴なふ習とはいへ、かくのみ進み行かんには、國家經濟の前途今更に思ひやらるゝよ」といふと慷慨なり。(麥藁帽子の傳の中)

誇張 事物をその實際よりも誇大にして云ふを誇張といふ。例へば我國の諺に「苦髮樂爪」といふが如く愁のおびただしきを事よせて「白髮三千丈」といひ、また甚だ狭小なる土地を形容して「彈丸黒子の地」といふが如き、これなり。

○九牛の一毛に等し。

○一日千秋の思あり。

○百千の高提灯一度にばつと立てたるは、千世界の千日月一度に見ゆる如くなり。(國姓爺の中)

一 列志の諸葛亮傳の語による

二 伊勢武者は昔ひなどしの鎧着て宇治の綱代にかゝりけるかな
(源仲綱)

引用 古人の言語または故事を挿みて文を装ふを引用といふ。例へば、先づ我より始めよといふべきを、古人の語を引いて「請ふ隗より始めよ」といふが如き、これなり。

○これぞ「君臣水魚」とも申し奉るべきか。

○「衆口金を鑠す」と、古人の言宜なるかな。

○その下流に遙に見ゆるは、橋の小島が崎なりとぞ。宇治の綱代にかゝりけるかな」とよみたる昔も忍び出でらる。

對句 相異なる二事物をならべて相對照せしむるを對句といふ。例へば、「人の短を謂ふこと勿れ、己が長を説くこと勿れ」といひ、また「熱する時は火の如く、冷なるときは氷の如

し」といふが如き、これなり。

○樂は苦の種、苦は樂の種。

○山行かば草むすかばね、海行かばみづくかばね。

(天伴家持)

○沖には平家、舷をたゝきて感じけり、陸には源氏、簾をたゝきてどよめきたり。(扇の鮎)

○上野は築き成されたる公園なり、陰氣なる神の庭なり、貴族的なり、淺草は埋め立てたる公園なり、陽氣なる佛の宿なり、平民的なり。上野は靴に石段を登るべく、淺草は雪踏に敷石を行くべし。

層進 その程度を層一層進めゆくやうに語句を排列す

るを層進といふ。例へば「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」と云ふが如き、これなり。

○一度ならず二度ならず、三度も五度も試みたり。

○學んで知を蓄ふる人は尊ぶべし。勤めて業を成せる人は又尊ぶべし。志して道を求むる人は愈尊ぶべし。誠ありて徳をほどこせる人は又愈尊ぶべし。

警語 語簡にして意味深く、言奇にして意順なるものを警語といふ。例へば「論語讀みの論語しらず」雞を割くに焉ぞ牛刀を用ひんといふが如き、これなり。

○急がば廻れ。

○頭剃るより心を剃れ。

○何人も常識がなければならぬ。しかし常識のある人はすくない。その點からいふと、常識は非常の識である。

設問 わざと問を設けて讀者の注意を促すを設問といふ。例へば「霞か雲かはた雪か」「舜何人ぞ我何人ぞ」といふが如き、これなり。

○吾人の持論此の如し。諸君以て如何と爲す。

○我々後人がその測量事業の惠を被るのみならず、外人をも驚嘆せしめて、わが國の光を添へたるものは誰にかある。下總の一隅より起りたる伊能忠敬、その人なり。

反語 文面の意味と裏面の意味と相反するやうに言ふを反語といふ。例へば「豈快ならずや」といふは「實に快なり」に等しく、「汝の如く安閑とくらはせば、生れ甲斐ある事なるべし」といふは、實はその反對に「生れ甲斐なかるべし」の意味なるが如き、これなり。

○世の中にたえて櫻のなかりせば、春の心はのどけからまし。(在原業平)

日本外史徳川正徳末尾

○蓋し武門天下を平治すること是に至りて其盛を極むと云ふ。(此後は衰運に向ふべし之意あり)

第八篇に説明す

倒置 特に強く言はんとする語を先に言ふため、及び句調もしくは律格を整ふるために、通例の順序を倒にしたる

をいふ。例へば「汝等よく聽け」を「よく聽け汝等」といふが如き、これなり。

○切に望む、吾人と志を同じうせんことを。

○恩賜の御衣はこゝにあり、今も朝夕さゝげては、都の方に向ち向ひ、君が餘香を拜しつゝ。

○立ちかへり見れどもあかず、天雲もいゆきはゞかる富士の高嶺は。(本居大平)

感嘆 語句に「嗚呼」かな「よ」などの聲を漏らして、切なる感情を言ひ現はすを感嘆といふ。例へば「嗚呼悲しいかな」あら笑止や「月よ花よ」といふが如き、これなり。

○嗚呼忠臣楠子之墓。

*
貞室の句

○松島やあゝ松島や松島や。(失名)

○雪ぐもり身の上を啼くからず哉。(文草)

反覆 讀者をして注意を長からしめ、文意を深くするた
めに、同じ語を繰り返すを反覆といふ。例へば、これはくくと
ばかり花の吉野山「秘すべしく」あなかしこくといふが
如き、これなり。

○あぶらさしくつゝ寝ぬ夜かな。(兎貫)

○大君のために斃れし大丈夫は、げに獅子よりも勇し
く、梅檀よりも香しき、名を後の世に残しけり、名を後
の世に残しけり。

省略 思想を極めて簡略に言ひ表はすために緊要なら

一
二條天皇

二
後白河上皇

三
勤修寺光頼

四
光頼の弟惟方

ざる語を省くを省略といふ。例へば枕の草子の開卷第一節
の中に「春は曙」「夏は夜」といへるは「春は曙よし」「夏は夜よし」の
意なるが如き、これなり。

○勅なればいとも畏し、されど鶯の「宿は如何にかせし」
と問はゞいかゞ答へむ。(拾遺集)

○主上はいづくにおはしますぞ。「黒戸御所に」「上皇は」
「一本御書所に」「内侍所は」「温明殿に」「劍璽は」「夜御殿
に」「中宮は」「清凉殿に」と左衛門督次第に尋ねければ、
別當かくぞ答へける。(平治物語の中)

掛詞 同音異義の語を用ひて、一語に二義を通はしむる
を掛詞といふ。例へば、人々の心々に向ふ事と、地名の向島と

を掛けて「こゝろづく」に向島といふが如き、これなり。

○何時かわがみのをばり(身の終り、美濃尾張)なる熱田の八劍伏し拜み、汐干に今や(成る)鳴海瀉。(太平記の中)

○秋の野に人まつ(待つ、松蟲の聲すなり、われか)と行き
ていざとぶらはん。(古今集)

縁語 修飾のために、互に縁ある語を選びて言ひ表はすを縁語といふ。例へば、衣、經、たて綻ぶ、へる、糸、亂ると類を求めて云ふが如き、これなり。

○衣のたてはほころびにけり 年をへし糸のみだれのくるしさに。(義家と貞任との連歌)

○さしてゆく笠置の山を出てしよりあめが下にはか

くれがもなし。(後醍醐天皇)

枕詞 音調をととのへ又は一種の聯想を起さしむるために、或語に冠らす修飾句を枕詞といふ。これ我國特有のものなり。例へば、久方の天あしひきの山といふが如き、これなり。通例古文または和歌等に用ふ。

○櫻花さきにけらしも、足引の山の峽より見ゆるしら雲。(絶貫之)

○あたらたまの年の終になるごとに、雪も我身もふりまさりつ。(在原元方)

○この歌天地の開けはじまりける時より出て來にけり。しかあれども世に傳はれることは、久方の天にし

ては下照姫に始まり、あらがねの土にしては須佐之男の命よりぞ起りける。(古今集の序の中)

句拍子 調子を最も流暢にするために句を整ふるを句拍子といふ。例へば、太平記の俊基朝臣の東下りに「落花の雪に踏み迷ふ、片野の春の櫻狩、紅葉の錦を衣て還る、嵐の山の秋の暮」云々(七五調)といふが如き、これなり。なほ左に平家物語の大原御幸及び八犬傳初卷の一節を掲ぐべし。

○青葉まじりの遅櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲きみだれ、八重立つ雲の絶間より、山郭公の一聲も、君のみゆきを待ち顔なり。

○義、實道理に責められて、思はず馬の鬣へ、落す涙は道

芝に、結ぶがごとき本の露末の雫と親と子が、後れ先だつ生き死にの、海よりあらしき鯨波の聲。

第七篇 文體

第一章 古文及び擬古文

日本文學に於ける古文は、凡そ奈良朝より足利時代までに行はれたる文章にして、單語・文法・文章法ともに、主として奈良朝又は平安朝に行はれたる口語を基礎として成れるものなり。古文は左の三大時期に別つことを得。

一 上古文 古事記・祝詞・宣命等の文章の如く、奈良朝及び其以前のものをいふ。

二 中古文 竹取物語・伊勢物語・土佐日記・源氏物語・枕の草子・大鏡等の文章の如く、平安朝のものをいふ。

三 近古文 保元物語・平治物語・源平盛衰記・平家物語・太平記・十六夜日記・方丈記・徒然草・増鏡・神皇正統記等の如く、鎌倉時代より足利時代にかゝるものをいふ。
左に右の諸書の文例を掲ぐべし。但し、近古文の諸書の例は國語讀本に編したれば、茲には多くを載せざるなり。

○稻羽の素菟

古事記

兄弟八十神共に稻羽に行きける時に、大穴牟遲神に借を負せ從者として率て往きき。是に氣多の前に到りける時に裸なる菟伏せり。八十神その菟に云ひけらく、汝爲むは、

原文の例
兄弟八十神共行稻羽時於大穴牟遲神負借爲從者率往

この海鹽を浴み、風の吹くに當りて、高山の岑の上に伏してよといふ。故其菟、八十神の教ふるまゝにして伏しき。是にその鹽の乾くまに、其身の皮、悉に風に吹き裂かえしからに、痛み泣き伏せれば、最後に來ませる大穴牟遲神、其菟を見て、何ぞも汝泣き伏せると問ひ玉ふに、菟白さく、「僕隱岐の島にありて、此國に渡らまく欲りつれども、渡らむ便無かりし故に、海の鰐を欺きて言ひけらく、吾と汝と族の多き少きを比べてむ。故汝は、其族のありの悉率て來て、此島より氣多の前まで、皆列み伏してわたれ。我その上を踏みて走りつゝ、數み渡らむ。是に我族と、何れ多きといふことを知らむ。かくいひしかば、欺かえて、列み伏しし時

に、吾其上を踏みて、數み渡り來て、今地に下りむとする時に、吾汝は我に欺かえつ」と言ひ竟れば、即ち最端に伏せる鰐、我を捕へて、悉に我衣服を剥ぎき。此に因りて泣き患ひしかば、先だちていでまし、八十神の命以ちて潮を浴みて、風に當りて伏せれ」と教へたまひき。かれ教のごとせしかば、我身悉に傷はえつ」と白す。是に大穴牟遲神、その菟に教へ玉はく、「今疾くこの水門に往きて、水もて汝が身を洗ひて、即ち其水門の蒲の花をとりて、敷き散して、其上に輒い轉びてば、汝が身もとの肌、如、必ず癒えなむものぞ」と教へ玉ひき。故教の如せしかば、其身木の如くになりき。此稻羽の素菟といふ者なり。

*延喜式に載せたり

原文の例
辭別伊勢爾
坐天照大
御神能大前
爾白久

○祈年祭の祝詞の一節

辭別きて、伊勢に坐す、天照大御神の大前に白さく、皇神の見霽かします、四方の國は、天の壁立つ極み、國の退き立つ限、青雲の靄く極み、白雲の墜り居向伏す限、青海原は棹柁干さず、舟の櫓の至り留る極み、大海原に舟滿ち續けて、陸より往く道は荷の緒結ひ堅めて、岩根樹根踏みさくみて、馬の爪の至り留る限、長道間無く立ち續けて、狭き國は廣く、峻しき國は平けく、遠き國は八十綱打掛けて引き寄する事の如く、皇大御神の寄さし奉らば、荷前は、皇大御神の大前に、横山の如く打積み置きて、殘をば平けく聞召さむ。

又皇御孫命の御世を、手長の御世と、堅磐に常磐に齋ひ奉り、茂し御世に幸へ奉るが故に、皇吾睦神、漏伎神、漏彌命と、鵜じ物頸根つきぬきて、皇御孫命の宇豆の幣帛を稱辭竟へ奉らくと宣る。

○藤原永手薨去の時の宣命

藤原の左大臣に詔りたまふ大命を宣る。大命に坐詔りたまはく、大臣明日は參出來仕へむと待たひ賜ふ間に、休息安りて參出來ます事は無くして、天皇が朝廷を置きて罷りいますと聞召して思ほさく、およづれかも、たはことも、かも云ふ。信にし有らば、仕へ奉りし太政官の政をば、誰に

*續日本紀に載せたり
原文の例
藤原左大
臣爾詔大命
乎宣大命坐
詔久大臣明
日者參出
來仕奉止待
比賜

任さしかも罷りいます。孰に授けかも罷りいます。恨めしかも悲しかも。朕が大臣誰にかも我が語らひさけむ。孰にかも我が問ひさけむ。悔やしみ惜らしみ。痛み酸しみ。大御泣哭か。しつゝ坐すと。詔りたまふ大命を宣る。悔やしかも惜らしかも。今日よりは大臣の奏し、政は聞看さずや成らむ。明日よりは大臣の仕へ奉りし儀は看行さずや成らむ。月日累り往くまに、悲しき事のみし彌起るべきかも。歳時積り往くまに、さぶしき事のみし彌益るべきかも。朕が大臣、春秋の麗しき色をば、誰と俱にかも見行はし。弄び賜はむ。山川の淨き所をば、孰と俱にかも見行はし。あからへ賜はむと、歎き賜ひ憂ひ賜ひ大座し座すと。詔り

たまふ大命を宣る。みまし大臣の萬の政總ね以ちて、怠り緩む事なく。曲傾くる事なく、王臣等をも彼此別く心無く。普く平けく奏さひ。公民の上をも廣く厚く慈しみ。奏す事、此のみに在らず。天皇朝を暫くの間も罷り出でて休息まふ事なく、食國の政の善く在るべき狀。天下公民の息安まるべき事をも、旦夕夜日と云はず。思ひ議り奏さひ。仕へ奉れば、歎しみ明らけみ。おだひし。みたのもしみ。思ほしつゝ大坐し。坐す間に、忽ち朕が朝を離りて罷りましぬれば、言はむすべも無く。爲むすべも不知に、悔しび賜ひ大座し。座すと。詔りたまふ大命を宣る。又事別きて詔りたまはく。仕へ奉りし事廣み厚み、みまし大臣の家内の子等をも、はふ

り賜はず失ひ賜はず慈み賜はむ起し賜はむ温ね賜はむ
かへりみ賜はむみまし大臣の罷道もうしろ軽く心もお
だひに念ひて平けく幸く罷りとほらすべしと詔りたま
ふ大命を宣る。

○龍の玉

竹取物語

大伴御行の大納言は、わが家にありとある人を召し集め
てのたまはく、「龍の首に五色の光ある玉あり。それを取
りて奉りたらん人には、願はん事をかなへん」とのたまふ。
男ども仰の事を承りて申さく、「仰の事はいと尊し。たゞ

しこの玉、容易く得取らじを、況や龍の首の玉はいかゞ取
らんと申しあへり。大納言のたまふ、「君の使といはんもの
は、命を捨て、も己が君の仰事をばかなへんところ思ふ
べけれ。この國になき天竺唐土の物にもあらず。この國の
海山より、龍は降り登るものなり。いかに思ひてか、汝等難
き物と申すべき。男ども申すやうさらば如何はせん。難き
物なりとも、仰事に従ひて求めにまからんと申す。大納言
見笑ひて、「汝等君の使と名を流しつ。君の仰事をばいかゞ
は背くべき」とのたまひて、龍の首の玉取りにとて出した
て給ふ。この人々の糧食物に、殿のうちの絹綿錢など、有る
限取り出で、そへて遣はず。この人々ども歸るまで、いもひ

をして我は居らん。この玉取り得では家に歸り來なるとの
たまはせけり。

○あづまくたり

伊勢物語

昔男ありけり。身を益なきものに思ひなして、京には居ら
じ、東の方に住むべき所求めにとて行きけり。信濃の國淺
間の岳に烟の立つを見て、

信濃なる淺間の岳に立つ烟

をちこち人の見やはとがめぬ

もとより友とする人、一人二人して諸共に行きけり。道知

三河の碧油郡
知立町の東に
あり

れる人もなくて惑ひ行きけり。三河の國八橋といふ所に
至りぬ。そこを八橋といふことは、水の蜘蛛手に流れ分れ
て、木八つ渡せるによりてなん、八橋とはいへる。その澤の
邊の木陰に下りゐて餉くひけり。その澤に燕子花いとお
もしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつば
たといふ五文字を、句の上に据ゑて、旅の心をよめ」といひ
ければよめる。

から衣きつゝなれにしつましあれば

はるぶきぬるたびをしぞ思ふ

とよめりければ、皆人餉の上に涙おとしてほとびにけり、
行きくゝて駿河の國に至りぬ。宇津の山に至りて、わが入

駿河の安倍郡
にあり

らんとする道はいと暗う細きに、ツツミ葛はひ茂りて、物心細く、すゞろなる目を見る事と思ふに、修行者あひたり。かゝる道には、いかてかおはするといふに、見れば見し人なりけり。京にその人の許にとて文書きてつく。

駿河なる宇津の山邊のうつつにも

夢にも人にあはぬなりけり

富士の山を見れば、五月のつごもりに雪いと白うふれり。

時しらぬ山は富士の嶺いつとてか

鹿の子まだらに雪のふるらん

その山は、こゝに譬へば、比叡の山を二十ばかり重ね上げたらんほどして、形は鹽尻のやうになんありける。なほ行

きくゝて武藏の國と下總の國との中に、いと大きな河あり、それを隅田川といふ。その河の邊に群れ居て、思ひやれば、限なく遠くも來にけるかなといひあへるに、渡守はや船に乗れ。日も暮れなんといふに、乗りて渡らんとするに、皆人ものこひしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の嘴と足と赤き鴨の大きさを、水の上には遊びつゝ、魚を食ふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人見しらず。渡守に問ひければ、「これなん都鳥」といふを聞きて、
名にし負はゞいざ事とはん都鳥

わが思ふ人はありやなしやと

とよめりければ、船こぞりて泣きにけり。

○はねといふ處に來ぬ

土佐日記

承平五年正月
土佐の安藝郡
にあり

十一日奈半なはんより曉に船をいだして室津むろを追ふ。人皆まだ
ねたれば海の有様も見えず、唯月を見てぞ西東をば知り
ける。かゝる間に皆夜明けて、手洗ひ例の事どもして晝に
なりぬ。今し羽根はねといふ處に來ぬ。若き童此處の名を聞き
て、はねと云ふ處は鳥のはねの様にや有ると云ふ。まだ幼
き童の事なれば人々笑ふに、ありける女の童なん此歌を
よめる。

まことにて名を聞く處はねならば

飛ぶがごとくに都へもがな

とぞいへる。男も女もいかでとく都へもがなと思ふ心あ
れば、此歌よしとはあらねど、げにと思ひて人々忘れず。
このはねといふ處問ふ童のついでに、又昔の人を思ひ出
でて、いつれの時にか忘る。今日はまして母の悲しむ事
は、下りし時の人の數たらねば、ふるき歌うたに數は足らでぞ
歸るべらなる」と云ふ事を思ひ出でて、人のよめる。

世の中に思あれども子を戀ふる

思にまさる思なきかな

○木の道は多くみ

北ほくにゆく雁かりぞ
鳴くなるつれ
て、こし數は足
らでぞ歸るべ
らなる
(讀人しらす)

源氏物語

萬の事によそへておぼせ。木の道は多くみは、萬の物を心
 まりせて造り出すも、臨時はもてあそびをのゝ、その物
 と何とも定まらぬは、そばつたざればこゝるも、げふかう
 もし川べうりなると、時まつけは、さほ茂變へて、今めり
 しきに目うつりて、をかしたもあり。大事として、まことに
 うるとしき人の調度のかざりとする、さだまれるやうあ
 るものを、難かくまいつるとなん、なほまことの物の上手
 は、さほことに見えわかき侍る。又ゑどころは、上手多うれ
 ど、すまがきまえらばれて、つぎくまさらには劣り優るけ
 ぢ、ふとしも見えまうまほ。かゝれど、人の見およばぬ蓬

萊の山、あら海の怒る魚のまが、から國のはげしだけ
 だものゝかこち、めに見えぬ鬼の顔などの、おどろくし
 くはくりさるものゝ、心まりせて、一きは人の目茂おど
 強うして、煮ちまは似ざらめど、はてありぬを。よのつね
 は山のぬゝずまひ、水の流き、目に近き人の家居ありさほ
 げまに見え、なつうしくやそらびさるかたなど茂、まづ
 まかきませで、まよくあからぬ山のけしき、木ふりく世は
 おきてぬゝみなし、けぢうた籬のうちをば、そのこゝるま
 らひおきておどなん、上手はいといきやひことに、わるも
 のゝおよばぬ所多うめる。手をうたさるまを、深たことは
 なくて、こゝろしこのてん、ねかにそしりかき、ろこまうと

あくけしだばめるは、うちみるよ、かどくしくけしただち
 これど、なやまことのすぢを、こほやうにかきえたるは、う
 そべのふできえて見ゆれど、今ひととびとりからべて見
 せは、なほおちよなんよりなる。そかなだことだにかくこ
 う侍れ。まして、人の心は時ふあさりて、けしきばえらん見
 るめのなさをば、え頼むましく思ひたまへ侍り。帚木の巻

○春ハあけ平の

枕の草子

春ハ曙やうく白くあり行く、山ぎを少し明りて、紫だち
 たる雲乃細くたふびきたる。夏を夜。月の頃ははらなり、闇

もなほ螢飛びちがひたる、雨あどの降るさへをかし。秋ハ
 夕暮。夕日花やかにさして、山の端いと近くなりたるよ、鳥
 のねどころへ行くとして、三つ四つ二つあど飛び行くさへ
 あはれなり。まいて雁あどの列ねたるが、いと小さく見ゆ
 る、いとをかし。日入り果て、風のおと蟲のねなど、いと阿
 それあり。冬は雪はふりたるはいふべきよもあらき。霜な
 ど乃いと白き、又、さらで毛いと寒き、火あど急ぎおこして、
 炭もてわさるも、いとほきくし。晝にありて、ぬるくゆる
 びもて行けば、炭櫃火桶乃火もあろき灰がちになりぬる
 へまろし。

○大納言行成卿

大 鏡

後一條天皇*

*みかどをさなくおはしまして、人々に遊びものまゐらせよ」とおほせられければ、さまざまこがねしろかねなど心をつくして、いかなる事をがなと風流をしいて、もてまゐりあひたるに、この殿はこまつぶりに、むらごの緒つけて奉り給へりければ、怪しの物のさまや、こは何ぞ」とはせたまひければ、しかくの物になん」と申す。まはして御覽じおはしませ、興あるものに「など申されければ、南殿に出でさせ給ひて、まはさせ給ふに、いとひろき殿のうちに残らずくるめきあるきければ、いみじう興せさせ給ひて、

これをのみ常に御覽じ遊ばせたまへば、こと物どもはこめられにけり。

又殿上人扇どもしてまゐらするに、こと人々は骨にまき糸をし、或は、しろかねこがね、沈紫檀の骨になん、すぢをいれ、ほりものをし、えもいはぬ紙どもに、人のなべて知らぬ歌や詩や、六十餘國の歌枕に名あがりたる所々などをかきつゝ、人々参らするに、例のこの殿は、ほねの漆ばかりを、をかしげにぬりて、黄なるから紙のした繪ほのかにをかしきほどなるに、おもての方には樂府をうるはしう眞にかき、裏には御筆とゞめて草にめでたくかきて、奉りたまへりければ、うちかへしく、みかど御覽じて、御手箱にい

れさせ給ひて、いみじき御寶とおほしめしたりければ、こ
と扇どもは、たゞ御覽じ興ずるばかりにて、やみ侍りにけ
り。いづれもくく帝王の御感侍るにますことやはあるべ
きよな。

○爲朝の生捕られ

保元物語

爲朝近江に在りけるが、晝は山に隠れ、夜は里に出て、郎等
一人落ち残りけるを召し具し、明し暮し、さのみ山野に臥
す事も物憂く、或片山寺に立寄り、郎等をば法師になし、時
々頭陀かせさせなどして日を送り、つくくと思ひけるは、

*近江の輪田といふ所なり右山寺の邊なりといふ

「さても安からぬ事かな。左大臣殿といふ不覺人にさへら
れ、合戦に打負け、親父兄弟を滅し、身を徒らになしつるこ
そ口惜しけれ。中にも義朝一矢に射殺すべかりしを助け
置き、今は親の敵に成りぬるこそくやしけれ。所詮鎮西に
下り、九國の者共催し攻め上り、王城を討ち傾けんに、義朝
定めて防がんとす。縦令百萬騎が中なりとも駈け破り、義朝
を擱んで提げ、首ねぢ切つて、入道殿の供養に手向け、與黨
の奴原追ひ靡かし、新院の御世となして、爲朝日本國の總
追捕使とならん事、何の仔細かあるべき」と、おほけなき心
ぞ附きにける。

急ぎ上らんと思ひけるが、其折節平兵衛尉家貞、鎮西より

大勢にて上洛しけるが、郎等共淀川尻に充滿しければ、時分悪しかりなん、暫し其程を過ぐさんとためらひける程に、重病を受けて萬死一生となり、兎角して助かりけれども、起居も合期せざれば、或浴室に下り、療治を加へけるに、唇り合ひたる甲乙人等、あな怖し、人間とは見えずと怖ぢをのゝき、あやしみをなせり。所の土民是を見て、領主佐渡、兵衛尉重貞に告ぐ、あはれ是は鎮西八郎よと思ひて、見知りたる雑色を遣し見せけるに、疑なき八郎殿と申しければ、重貞家の子郎等を始め、所の住民等まで催し集めて、三百餘人押し寄せ、浴室を四重五重に押し圍み、其中にしたたか者十四五人選んで、わざと太刀をば持たせず、浴室の

中へ亂れ入り、左右なく搦め捕らんとす。爲朝少しも騒がず。つと立つて十人手組して寄る所を、三人掻い摑み、押し合ひ、ひしくとしめ殺して捨て、前後左右より續いて寄する二人をば、摑んで引きよせ、頭と頭と折り合せ、ひしいて投げ捨て、一人をば湯桁に押し當て、首ねぢ切つて投げ出す。或は拳にて胸をつかれ、のけざまに倒れて死す。或は腰の骨踏み折られて、這々逃げければ、續いて入る者なし。湯屋の内震動して、男女周章て迷ひ、走り出づ。さらば湯屋に火懸けて焼き殺せと、匍りければ、爲朝湯屋を蹴破り出でけるが、柱を一本引き抜いて、うちかづき走りければ、大勢追ひ來る。立ち歸つて折き殺し、敲き殺し、散々に振舞ひ

けれども重病日數積つて合期ならぬ時分なりける間、暫しこそ有りけれ、敲く手すくみ力弱りて、走り倒れけるを、者共走り寄り、是彼とり附く程こそあれ、折り重なり摺み附く。暫しこそ拳にて打ちのけたれども、次第に力疲れ、心は猛く思へども、おめくと生捕られけり。

○箱根路

十六夜日記

延治三年六月
伊豆の田方郡
にあり今の三
島町の地なり

廿八日いづの國府をいでて、箱根にかゝる。いまだ夜深かりければ、
たまくしげ箱根の山をいそげども

なほあけがたきよこ雲のそら

足柄山は道とほしとて、箱根路へかゝるなりけり。

ゆかしさよそなたの雲をそばだて、

よそになしぬるあしがらの山

いとさかしき山を下る。人の足もとゞまりがたし。湯坂とぞいふなる。からうじてこえはてたれば、また麓に早川といふ川あり、まことに早し。木の多く流るゝをいかにと問へば、あまのもしほ木を浦へ出さんとして流すなりといふ。あづまぢのゆさかをこえて見わたせば

しほぎながるゝはやかはの水

湯坂より浦にいでて、日くれかゝるに、とまるべき所遠し。

相模の足柄郡
にあり湯木村
の近所なり

伊豆の大島まで見わたさるゝ海づらをいつことかいふと問へど、知りたる人もなし、あまの家のみぞある。

あまのすむその里の名もしらなみの

よするなぎさに宿やからまし

丸子川といふ所をいとくらくて、たどりわたる。こよひは酒勾さかといふところにとゞまる。明日は鎌倉へ入るべしといふなり。

相模の足柄郡
にあり丸子川
の東岸なり。

○行く川のながれ

方丈記

行く川のながれは絶えずして、しかも、もとの水にあらず、

よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとゞまる事なし。世の中にある人と住家と、又かくのごとし。玉敷の都のうちに、棟を並べ、薨をあらそへる、たかきいやしき人のすまひは、代々をへて盡きせぬものなれど、是をまことかたとたづぬれば、むかしありし家はまれなり、あるは去年やぶれて、今年ことは作り、あるは大家たかほろびて、小家ちかとなる。すむ人も之におなじ。處もかはらず、人もおほかれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に、僅に一人二人なり。朝に死に、夕に生るゝ習、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず生れ死ぬる人、何方より來りて、何方へか去る。又知らず、假の宿、誰が爲にか心を惱し、何によりてか目を悦ばしむる。

其主と住家と、無常を争ひ去るさま、いはゞ、朝顔の露に異ならず。或は露落ちて花残り、残るといへども朝日にかれぬ。或は花は萎みて露なほ消えず、消えずといへども夕をまつことなし。

○此木なからましかば

徒然草

*山城の宇治郡にあり

神無月乃頃、栗栖野と云ふ所、茂過ぎて、阿る山里に尋ね入ると侍りしよ、はるうなる苔の細道をぬき分けて、心ほろく住みなしゝるゆゑあり。木の葉よりづもるゝかけひろ粟ならでも、露おやあふものなし。園伽棚は菊紅葉など、茂

まちらしゝる、さすが小住む人のあればあるを。かくてもあらまゝなると、阿はまよみる程よ、かゝこの庭よ、おろきなる柑子の木は、枝も多し、よありゝるが、ほそり茂きびしく圍ひゝりしよ、少しよとぎめて、この木なからましかばと覺えいか。

擬古文といふは、徳川時代に興れる國學者等が、奈良朝もしくは平安朝の人の文に擬へて書きたる文章にして、思想は後世のものなれども、用語措辭等すべて古代の模範に従ひしものなり。左に其一例を掲ぐべし。

○隅田川に舟を泛べて月をもてあそぶ序

*賀茂風洲全集に載せたり

賀茂眞淵

いつはあれど、照る月の秋のさかり、いづこはあれど、行く水のすみだ川に、夕波のふた國かけたる月見むとて、からやまとの文人、絲竹にしもたへたるをつらねて、うかぶる事あり。船はしほのまに、棹ならずしてのぼり、岸は舟のまに、居ながらにして、ぞうつる。岸はるかに晴れて、百のうてなにすだれを捲き、風しづかに吹きて、ちの舟の帷をうごかせり。あるはくが、あるは船、あるはたかき、あるはいやしき、吳のまひびめ、高麗のわざをぎ、色は波に匂ひ、聲は空になむすみにける。これやこの蘆荻を分けつる國にやあるらむ、都鳥に言問ひける。川にぞあるらし。時の

ゆければ、かゝる都にしもなりにける事を、あるは目によるこび、心におどろき、あるは酔ひ泣きして、今をほめ、歌しのびして、古をなむ語らひける。時に、ある人のいへらく、「わがみかどに、すみだ川てふ河こそ多けれ、うちよする駿河なる、大鳥の出羽なる。この武藏なるは、古の言の葉の集には、下つ總のあはひと書かれ、後の道ゆきぶりの日記には、相模のさかひなりとぞしるしける。いでや、月まつ程のなぐさめに、人々此事さだめ給はむや」といへば、あるが中に、ひとりあげつらふことは、それ古の集は、後の人の筆を加へたるあり、後の日記は、野守にとひてしるす事あれば、よるべきもの、なづむべからざるをや。そも、蘆荻をや

分けつらむ、都鳥にや言問ひけむ、蘆荻は人草しげからむ
 さがにして、鳥の名は都とならむしるしにぞありけらし。
 しかあれば、かゝる都のうちにながる、川をしも、たえせ
 ぬ御世のためしにも引き、ふりにし名どころのよすがに
 もいふべきなりけりと言ひをはれば、まちとりて、物の音
 をわななかし、すみのぼる月にうそぶきいてたる、いづれ
 の所かはしかむ、いつの時にかはわすれまし。すなはち、舟
 をぞりてかしこければ、今宵のありさま述べつくすべし。
 たゞわれひとり酔ふ、かゝれば何の心をかいはむ。

わたつみの夕しほのぼる隅田川

月のそらまで舟もゆかなむ

第二章 近世文及び現代文

古文に對して、便宜上近世文及び現代文と稱するは、凡そ徳
 川時代より明治の大御代にかけて行はるゝ文章にして、單
 語には漢語多く、文法・文章法ともに漢文直譯體を交へ、殊に
 明治の文章に於ては西洋文翻譯體をも交ふるに至れり。
 近世文とは、凡そ徳川時代の人の作れる文章をさして云ひ、
 その中にも和漢混淆文を主として云ふなり。左にその一例
 を掲ぐべし。

○水戸義公の御事業

*常山紀談より

湯淺元禎

水戸中納言光圀卿は、頼房卿の第三の子、東照宮の御孫なり。寶永十年威公の嗣未だ定まらざりしかば、嚴有院殿の仰にて中山備前守信吉水戸に至り、光圀卿三つに成り給ひしを見て、斯くと申し上げて、嗣に定まりぬ。正保二年史記の伯夷傳を讀みて深く感ずる所あり。これは兄の頼重立ち給はん事なるに、斯く定まりつれば、長子の方に家を譲るべき志これよりして起れり。是より又學問を好み給ふの志篤し。

明曆三年より大日本史を撰び始めらる。神功皇后を帝紀を黜けて後に列し、大友皇子を天子と定め、南朝を正統と

立てらる。皆此君の義烈なり。寛文三年頼房卿卒去あり。葬禮僧家の法を用ひず、瑞龍山に葬り威公と謚し、廟を水戸の城中に立てられ、祭祀の儀式を定め給ふ。殉死すべき士ありしに、自ら其家に至りて止めらるゝに、其理正しき故に殉死を止りしかば、この事聞えて殉死天下一統停止の旨仰せ出されしは、此君の故なり。

又兄の頼重卿の子松千代綱方を強ひて養嗣とせられん事を乞ひて、もし聞き入れられずば世を遜るべき志なりしかば、頼重卿許諾あり。松千代の弟采女綱條をも引取り養ひ給へり。明朝の遺民朱之瑜朱といひし文學ある者、清朝の粟を食せじとて日本に渡りしを、筑後柳川の文學、安東

*舞水と號す萬治二年長崎に來る博學多能光圀招きて其門人となる天和二年歿す年八十三

省庵その俸祿の半を分けて養ひ置きしを、召して師とし給へり。綱方病によりて卒去有りしかども、弟綱條を養ひ置かれし故即ち世嗣になし給ひぬ。

延寶元年孔子の堂を水戸に立て給はん爲、江戸の駒込の屋敷に假の設をなし給ふ。日本古よりの假名の文章を編みて三十卷となしたるを、天聽に達し後西院の帝名を扶桑拾葉集と賜はり、即ち獻じ奉り給ふ。天和二年朝鮮の使臣江戸に來り、三使進物の目錄禮儀を失せる故、三條の疑問有りしに、答ふる詞なかりしとなり。後西院の帝の勅命により、鳳足といへる御硯に銘を作られしかば、宸筆を下し給はりて賞美せさせ給ふ。その御詞の中に、備武兼文絶

代名士といへる句有りしを印に彫らせられしとなり。元祿三年領國を綱條卿に譲り給ひ、權中納言に任じ給ひしが、程なく辭表を奉りて、歌に

位山のほるもくるし老の身は

ふもとの里ぞ住みよかりける

是より常陸の久慈郡太田郷の西山に引籠り給ひしに、山莊の有様萱をもて葺き、門垣には蔦はひかゝり、たゞ竹がき一重にて、池に蓮を植ゑ、西山のほとりに桃數百株あれば、川の流の橋を桃源橋と名づけ、鹿を放ち鶴を飼はせ給ふに能くなつきけり。瑞龍山に壽藏を設け、衣冠を埋み、碑陰の銘を自ら作り給へり。

久慈郡小野平村旗櫻寺に祠堂を立て、賴義義家の神主を置かせらる。又攝州湊川に楠正成の墓を修し碑を立て、碑面に「嗚呼忠臣楠子之墓」と自筆し、陰には舜水の撰びし讚をほらせられ、又舜水の碑を瑞龍山に建てられ、其文集を輯して「門光源圀」と稱し給へり。彰考館を作りて和漢の群書を集められしに、遠國他郷に學士を遣し、半紙一行の反故をも、見るに隨ひ拾ひ收め給ひける程に、色々の書ども、編集有りけり、中にも禮儀類典五百卷は、日本古來よりの寶典と稱すべしといへり。

寛文五年領國中の淫祠三千八百こぼちすて、新地の寺院九百九十七除かれ、那珂郡にて廣野ありしに、馬を放ち牧

と爲し給へり。地の利を盡す術に心を盡され、海參・白魚・昆布を涸沼が浦にまき、海に蛤を放ち、是より海物多く出づ。山には漆椿多く植ゑさせ給ひけり。元祿十三年、西山に逝去あり、義公と謚せしとなり。

現代文とは、明治の大御代に行はるゝ文章をさしていひ、更に之を普通文・候文及び口語文に別つ。

普通文とは、今文の中にて殊に普通に行はるゝ文體にして、官報の文章をはじめ新聞雜誌の論說等に主として用ひらる。これは徳川時代の和漢混淆文の一變したるものなり。左にその一例を掲ぐべし。

*福澤百語より

○慈善に二種の別あり

福澤諭吉

人の病苦貧苦又は其不時の災難を憐み例へば病人に醫藥を施し、貧民に錢米を與へ、水火饑饉等の罹災者に財物を給し、病院貧院等に寄附するが如きは、既に發したる災難を緩和するの方便なり。又寺院に寄附して布教を助け、學校に資本金を與へて教育を擴張し、或は道路橋梁の開通修繕に義捐するが如き、凡そ是等の散財は、眼前に不幸の人を見て其苦痛を救はんとの旨に非ず、人間社會の組織に於て、國民に宗教の信心なく又學問上の教育なくしては、安寧を維持し民利國益を起すに由なく、遂には反對

の禍も計る可らざるが故に、云はゞ社會の不幸を未だ來らざるに防ぐの手段にして、道路橋梁等に心を用ふるも、其交通の便に由りて間接に利を興し害を防がんとするの趣意に外ならず。

されば等しく慈善の事にて、これは既發の急を救ひ、これは將來の幸福を謀るものにして、其事の美なるは兩様共に輕重の別なしと雖も、更に一步を進めて考ふれば、凡そ人間社會の惡事を止むるに、之を未發に注意して豫防の策を施すときは、勞費は輕少にして功能は大なるの常なり。一家の經濟にても、火の用心の費は火災の損耗よりも輕し、之を大にして云へば、一地方の大火に財産の損失

は無數にして、又その罹災者を救ふの費用も少からざれども、もしも此損失費用の金を以て數年前より水道を設けたらんには、平生の便利は云ふまでもなく、不時の火災を防ぎ得て、地方の利益如何ばかりなる可きなり。此邊より見るときは、昨今東京にても千萬圓の資本を以て水道工事を起したりと云ふ、其千萬圓を徳川時代二三百前に費さずして、久しく市民の利益を缺き、又年々歳々の火災に莫大の財産を失ひたるこそ、今さら遺憾なりと云ふ可し。

右の利害にして果して違ふことなくば、今日世の中の資力に餘裕ある人々が、寺院學校等に義捐して其事を助

明治二十八年

け、後進の少年輩を導いて智徳の門に入らしむるは、單に其本人を恵むのみに止まらず、天下後世の爲に秩序安寧を維持して利源を深くし、廻り廻りては義捐者その人も間接に餘澤を被ることあるべし。故に既發の災を救ふの慈善固より美なり、之を等閑に附す可らざるは勿論なれども、豫防の慈善法は其功德更に大にして更に美なりと云ふ可し。

候文とは、今日にては普通公私の書翰にのみ用ひらるゝ候體の文章をいふ。候文は鎌倉時代よりして漸く多く行はれ、徳川時代に至りて極度に達し、その時代の公文書類及び私用文は皆この文體なり。今日の候文はその影響によるもの

と謂ふべし。

口語文とは、現今日常の言語のどほりに書くを主とする文章にして、又言文一致體とも云ふ。この文體は、演説講談の速記を始め、新聞雜誌、著書等に益、多く用ひられ、初等及び中等の諸學校に於ても授けらるゝが故に、漸々國民的文學の基礎となるべきものなり。この口語文の模範は、今日東京にて行はるゝ中等以上の教育ある社會の言語を標準とす。而してこの標準語をそのまゝ書きて標準文となすべき事を理想とす。口語文に常體と敬體とあり。

常體とは、同輩以下に用ふるもの又は自叙體に用ふるものにて、カウシタ、ア、シタ、カウデアル、ア、デアルの如き話し

ざまなり。

敬體とは、敬意を表する必要がある場合に用ふるものにて、カウシマシタ、ア、シマシタ、カウデゴザイマス、ア、デゴザイマスの如き話しざまなり。敬體には、なほ特別の言ひかたあり。例へば、尊敬の接頭語をそへて、「御手御寶御親切」などといひ、又「くふを」を「たべる」「ゆくを」「おいでになる」「いふを」「おっしゃる」「みるを」御覽になる「御覽あそばす」といふが如き、これなり。口語文の書翰には敬體を用ふべし。すべて敬體の口語は、對者との關係の親疎長幼等によりて、述べかたに斟酌をなすべきなり。

第八篇 歌 體

文を散文と韻文とに別てば、歌は韻文の中に入るべし。さて韻文に要用なるものは律格なり。律格とは、節奏を保つために、音數または音韻に一定の規律を設くるをいふ。我國の歌は、専らその律格を音數の上に置けり。即ち左の如し。

(一)長歌 五七、五七、この間に五七を幾つ重ねてもよし、五七七。

○過近江荒都時作歌

柿本人麿

以下長歌の例
すべて萬葉集
より取れり

玉だすき	畝傍の山の
榎原の	聖の御代ゆ
あれまし、	神のことく
樛の木	いや繼々に
天の下	知るしめし、を
空に見つ	大和をおきて
青丹よし	奈良山を越え
いかさまに	思ほしめせか
天ざかる	鄙にはあれど
いはばしる	近江の國の
さゝなみの	大津の宮に

*反歌を附けざる長歌もあり又反歌は一首なるも數首なるもあり

天の下 知ろしめしけむ
すめろぎの 神のみことの
大宮は こゝと聞けども
大殿は こゝといへども
春草の 繁く生ひたる
かすみ立つ 春日の霧れる
百敷の 大宮どころ
見ればかなしも

反歌

さゝなみの 志賀の辛崎 さきくあれど
大宮人の ふね待ちかねつ

さゝなみの 志賀の大わた よどむとも

昔の人に またも逢はめやも

○望不盡山歌

山部 赤人

天地の わかれし時ゆ
神さびて 高くたふとき
駿河なる ふじの高嶺を
天の原 ふりさけ見れば
わたる日の 影もかくろひ
てる月の ひかりもみえず

原文の例
樂浪之思 賀乃辛崎
雖幸有、大 宮人之船
麻知兼津 左散離瀾
乃志我能 大和太興
杼六友昔 人二亦母
相目八毛

原文の例
田兒之浦
從、打出而
見者、眞白
衣、不盡能
高嶺爾雪
者零家留

白雲も
いゆきはかり
ときじくぞ
雪はふりける
語りつぎ
言ひつぎゆかむ

反歌

田子の浦ゆ 打出でて見れば 眞白にぞ
ふじのたかねに 雪はふりける

○令反感情歌

父母を 見れば尊し

山上憶良

妻子見れば 恵し愛し
世のなかは 如此ぞ理
もちどりの 拘はしもよ
早川の 行方知らねば
穿履を 脱ぎ棄る如く
踏み脱ぎて 行くちふ人は
岩木より 生り出し人か
天へ行かば 汝が名告らさね
汝が 隨意
地ならば 大君います
この照す 日月の下は

天雲の	向伏す極み
谷 蟻の	さ渡る極み
聞し食す	國の奥區ぞ
かにかくに	ほしきまに
	然にはあらじか

反歌

久方の 天路は遠し なほくに
 家に歸りて 家業をしまさに

○慕振勇士之名歌

大伴家持

ちゝのみの	父のみこと
はゝそばの	母のみこと
おほろかに	心つくして
思ふらむ	其子なれやも
大丈夫や	空しくあるべき
あづさ弓	末ふりおこし
投矢もち	千尋射わたし
つるぎ太刀	腰にとり佩き
あしひきの	八つ峯ふみこえ
さしまくる	こゝろさやらず
後の代の	かたり繼ぐべく

名をし立つべしも

反歌

大丈夫は 名をし立つべし 後の代に

聞きつぐ人も 語りつぐがね

(二)短歌 五七五七七

(短歌は多くは獨立すれども、また前例の如く長歌の反歌として長歌に附屬するもあり。)

○六歌仙

僧正遍昭

*狂歌も之に同じ
○歌よみは下手こそよけれ
天地が動きたしてはたまるものかは
(宿屋飯盛)
○ほととぎす啼きつるあとにあきれたる後徳大寺の有明の顔
(劉山人)

はち花葉の におまにままぬ 心もて

何うハ露を 玉とあざむく

在原業平

世の中に たえて櫻は なかりせば

春のさくろは 乃せけからまし

文屋康秀

吹くからよ あきの草木は 志茂るまは

うべ山風を 嵐と心ふらむ

喜撰法師

わか庵の 都のたけみ 志かぞ住む

世をうぢ山と 人を心ふなま

小野小町

色みえて うづらふも乃ハ 世の中ハ

人の心乃 花よぞありたる

大友黒主

鏡山 心ざ立ちよりて 見てゆらむ

年ふぬる身ハ 老いやまぬると

紀貫之

櫻ちる 木の下風ハ ぎむうらで

空よまらきぬ 雪ぞふまなる

凡河内躬恒

世をすて、 山ふ入る人 山よても

なやうき時を 心づち行くらむ

壬生忠岑

久方ハ 月の桂を 秋ハなほ

紅葉すきばや 照りほさるらむ

藤原俊成

駒やめて なほ水かはむ 山吹ハ

花の露ろふ 井手乃玉川

西行法師

心なき 身よもあはきと 知られなき

鳴立澤乃 秋のゆふぐれ

藤原定家

大空ハ 梅のにちひよ かすまつゝ

きもまもはてぬ 春の夜は月

○ 藤原家隆

かきと立つ 末の松山 布のくと

波よはなるゝ 横雲の空

○ 源實朝

ものゝふは矢並はくるふ 小手の上よ

霞たばしる 那須乃篠原

○ 宗良親王

君のぬめ 世のたは何か 後志あらむ

きてゝかひある 命なりせば

○ 契沖阿闍梨

心ある 人よ一夜の ぞどかりて

なるゝもはらし 阿志乃故郷

○ 香川景樹

大堰川 かゑらぬ水に かげ見えて

今年もさなる 山ざくらかな

(三) 旋頭歌 五七七五七七

春日なる 三笠は山よ 月乃ふね出づ

みやび茂は のむ酒杯に かげよ見えつゝ (萬葉集)

(四) 今様 七五、七五、七五、七五

○四季

慈鎮和尚

花

春の彌生の	あけぼのに
四方の山邊を	見渡せば
花ざかりかも	白雲の
かゝらぬ峯こそ	なかりけれ
郭公	
花橘も	にほふなり
軒のあやめも	かほるなり

夕暮さまの

五月雨に

山ほととぎす

なのりして

月

秋のはじめに	なりぬれば
今年も半ばは	過ぎにけり
わがよふけゆく	月影の
傾くみるこそ	あはれなれ

雪

冬の夜寒の	朝ぼらけ
ちぎりし山路は	雪かふし
心のあとは	つかねども

思ひやるこそ

あはれなれ

○三吉野

頼山陽

花よりあくる

みよし野の

春のあけぼの

見わたせば

もろこし人も

高麗こまびとも

大和ごころに

なりぬべし

(五)連歌

七七五七七五或は五七五七七この形式をつみかさねて五十韻百韻に至るものあり連歌は兩人又は兩人以上にて之を成す

○前九年の役に

衣のたては ほころびにけり

(源義家)

年をへし 糸のみだれの 苦しさに

(安倍貞任)

○寶治元年百韻連歌に

「山影しるき 雪のむらぎえ」と侍るに

あらたまの 年のこえける 道なれや

(後嵯峨院)

たえぬ煙と 立ちのぼるかな

春はまだ 浅間のたけの うすがすみ

(藤原爲家)

なかをへだつる 志賀の浦波

(六)俳句

五七五

*川柳も之に同じ
○外科へ行く
罪は道の列じ
もの
○うたしれの
顔へ一冊扇根
によき

立花北枝	河合曾良	越智越人	森川許六	各務支考	向井去來	志木野坡	内藤文章	服部嵐雪	板本其角
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

○蕉門十哲の句

鐘ひとつ	うれぬ日はなし	江戸の春	其角
黄菊白菊	その外の名は	なくもがな	嵐雪
雪ぐもり	身の上を啼く	からす哉	丈草
長松が	親の名で来る	御慶かな	野坡
玉棚の	奥なつかしや	親の顔	去來
歌書よりも	軍書にかなし	吉野山	支考
卯の花に	月毛の駒の	夜明かな	許六
ちるときの	心安さよ	けしの花	越人
病む僧の	庭はく梅の	さかり哉	曾良
山川で	心はやるな	花の雪	北枝

(七)新體詩

(簡單なる律格を以て束縛せず、七五調又は五七調等のみならず、作者に種々の律格の獨創を許す。或は律格に拘はらずして殆ど散文體のものさへあり、之を散文詩といふ。)

○松下清水

夏は餘所なる 深山の奥
 苔はなめらか 谷の阻路（音）
 岩のはざま たぎり落ちて 走る清水
 山松かげの 巖にふれて
 聲ある珠を 千々にぞ碎く (中學唱歌)

律格は
 七六、
 七六、
 六六六、
 七七、
 七七。

散文體

○忘れがたみの一節

安政二年十月二日、時刻は夜の亥の刻かとよ、地は裂け天墜つるかど驚かれたり。

みるく、百萬の人家、倉庫、神社、佛閣、倒るゝあり、崩るるあり、家にしかれ瓦にうたれて、死せるは幾許なるやを知らず。一時に落ち來る千萬の瓦、一時に崩るゝ百萬の家の響は、泣き叫ぶ老若男女の聲に和して、たとふるに物あらざりけり。 (外山正二)

前よりの例にも見ゆるが如く、歌に「字あまり」とて母音の増加を許すことあり。例へば短歌にして三十二文字より三十

六文字に至るものあり。左にその一二を掲ぐべし。

年ニふれば よはひは老いぬ しかはあれど

花をしみれば 物おももひもなし (藤原良房)

ありそ。うみの 浪間かきわけて かづくあまの

いきもつきあへず 物をこそおももへ (三條院讃岐)

ニ染殿の後の御前に花がめに櫻の花をまかせ給へるを見よめる

第九篇 國語史の概略

*御製
みつくし、
久米の子ら
が、粟生には、
かみち一も
と、それがも
と、それめ繫
ぎて、うちて
しひまじ。

(古事記)

神武天皇^{*}の大和の橿原の宮に御即位あらせられしより、皇紀一千四百五十四年桓武天皇の平安に奠都したまひしまでは、代々の天皇多くは大和の内に都したまひければ、文化の中樞たる帝都の言語は大和の言葉なりき。随ひて此間の文章歌詞たる古事記・萬葉集等の如きは、この大和の言葉を基礎として作られたるなり、而して言文一致なりしなり。平安奠都より皇紀一千八百五十二年鎌倉幕府の開かれしまでは、平安朝の時期にして、平安京即ち京都の言葉は我國語の中心となれり。竹取物語・伊勢物語・土佐日記・源氏物語・枕

*甲斐がねをさ
やにも見しが
けいれなく横
ほりふせるさ
やの中山
(古今集)

の草子等の文章は、この京都言葉の上に榮えしものにして、また言文一致なりしなり。此の如く平安朝の文學が燦爛として榮えたるために、我國文は保守的傾向を生じ、平安朝の末に至りては、言語の變ずると共に、漸く言文二途に分るゝ形勢となれり。

さて關東の言葉は、萬葉集及び古今集に東歌^{*}の中に入れられ、又「たみごゑ」と呼びて卑しめられたる方言なりしが、關東武人の勢力を得るに従ひ、關東言葉も亦勢力を得るに至り、京都の言葉及び文章上に影響せる所頗る著し。これ保元物語・平治物語・源平盛衰記・平家物語・太平記等に徴するも明らかなることなり。而して足利時代に於ける京都言葉は、謡曲

これは此あたりに住居致す者て御座る今日初寅なれば鞍馬へ参詣致さうと存じて離り出でた先づ急いで参らう夫についで爰に別けて心安う話す仁が御座るが内々約束て御座る程に是をきそつて参らうと存ずる
(連歌野沙門)
(座頭大市)も
(川は膝ざり)も御座ります
(かな)北へ
(やう)伊し
(水が早い)から
(おめい)方アお
(ぶない)、用心
(して)渡んなせ
(大市)ハテ
(成程)水の音が
(よつ)ほと早い
(道中)藤栗毛

狂言の詞の如きものに變遷し、平安朝の京都言葉とは甚だ異なるに至れり。

皇紀二千二百五十年徳川家康江戸に入城し、尋て江戸幕府の開くるに及びて、關東言葉に基づける江戸言葉は、愈、その勢力を高むるに至り、江戸子辯の價值は昔日の東歌もしくは、たみごゑの價值に比すべくもあらず、遂には京阪の言葉に對して文學の上にて勢力を占むるに至れり。然れども幕政の時代は封建政治にして、諸侯各地に割據せし時なれば、各地それゝに方言發達して、相互の交際上に不便を極めたり。

皇紀二千五百二十八年 今上天皇登極の始、王政復古して

新に都を東京に奠きたまひ、尋て三百諸侯領土を奉還し、ここに大日本帝國の盛運に向ふに至りて、國語の上に至大の變化を生ずることとはなれり。即ち江戸の言葉を基礎とし、幾多の變化を加へて琢磨せられたる東京語は、我文化の中樞たる帝國首府の言語なるが故に、明治の大御代の我等國民が、普通の話言葉とし標準語とすべきものとなり、明治文學の上にて勢力を占めつゝあり。予は之を帝國語と稱せんとす。

この帝國語が平安朝の言語即ち中古語と異なる重なる點を對照すれば、左の如し。

中古語

帝國語

發音の上にて

「ジ・ヂ」「ズ・ヅ」「カ・ク」の區別あり。ハ行の音殆ど無し。

同上の區別なし。但し、方言には、この區別を存するものあり。ハ行の音盛に行はる。

上二段活用も下二段活用も盛に行はれたり。

上二段活用は上一段活用に、下二段活用は下一段活用に合併せられたり。但し、方言には舊活用を存するものあり。

單語法の上にて

奈行變格も良行變格もあり。

奈行變格も良行變格も四段活用に合併せられたり。

形容詞は「よきよしよく」の例に活用せり。

形容詞は「よいよいよく」の例に活用す。

活用に未定既定の別あり。

同上の別くづれたり。

指定の詞に「なり」行はる。

「なり」は「だ」又は「である」となれり。

文章法の上にて

「ぞるこそ、それ」の如き係結法行はれたり。

係結法行はれず。但し、方言には之を存するものなきにあらず。

くき性質。性質よし。よく行ふ。よくば。よければ。あらば。われば。海あり。海ぞある。海こそあれ

語彙の上にて

和語の外に、稍多くの漢語及び少しの梵語等を有す。

和語の外に、甚だ多くの漢語と益増加しつゝある西洋語と少しの梵語等を有す。

更に帝國語は、之を我國の方言區域の大別よりいへば、東派に屬す。東派とは西派に對する名稱なり。この東西兩派の分界は、越後・信濃・遠江と越中・飛驒・美濃・三河との境界をなせる一線にして、北は親不知に起りて南は遠江灘に至る。その東西相異なる特徴を擧ぐれば、東派に「暑く、寒く」といふを西派にては「暑う、寒う」といひ、東派にて「見ない、聞かない」といふを「見ん、聞かん」といふが如き、これなり。

*但し伊勢大和等にては東派の如くいふ處あり

第十篇 國語學の大要

言語の研究に、實用的方面と理論的方面とあり。實用的方面とは言語を確實安全に使用する研究をいひ、理論的方面とは言語の性質、歴史及びその世界的位置を研究するをいふ。國語學の發達を觀るには、この二方面に注意せざるべからず。

國語學發達の跡を考ふるに、凡そ五期に分つことを得べし。第一期は國語學の萌芽したる時代にして、契沖以前なり。平安朝の頃より、歌學盛に起りて、作歌の法を教ふるために、假名遣・天爾乎波の用法等に注意し、且つ歌語の解釋につとめ、

寛永十七年即
享保三三〇
〇年生れ元祿
十四年歿す年
六十二

又日本書紀・萬葉集等を解釋することも始れり。要するに、その目的は重に歌道又は古典を研究するにありて眞に國語そのものを研究するにあらざりき。而してその重なる研究者は月卿雲客にして、祕傳を事とし師説を墨守するに過ぎざりき。

第二期は國語學の勃興したる時代にして、契沖以後宣長までなり。徳川氏起りて盛に文學を獎勵したる時に當りて、難波の僧契沖國語の研究を始め、其後新井白石・荷田春滿・賀茂眞淵・谷川士清・富士谷成章・本居宣長等出でて、文字・音韻・假名遣・單語・語源・語法等につきて、能く國語研究の端緒を開けり。然れども古典學に附隨する研究多くして、純粹なる語學的

享保十五年即
享保三三九
〇年生れ享和
元年歿す年七
十二

研究すくなかりき。此期に於ては、契沖の和字正濫抄、白石の東雅、同文通考、眞淵の語意考、冠辭考、士清の和訓栞、成章の挿頭抄、脚結抄、宣長の紐鏡詞の玉の緒、漢字三音考、古事記傳等著名なり。

天明元年即ち
皇紀二四四一
年生れ嘉永二
年没す年六十
九

第三期は國語學の隆盛となりたる時代にして、宣長以後守部までなり。第二期の後をつぎて本居春庭、鈴木胤伴、信友、石川雅望、東條義門、太田全齋、橘守部、平田篤胤等出でて、漸く國語の研究を精密確實ならしめたり。その語學的著書には、春庭の詞の八衢、詞の通路、胤の言語四種論、雅言音聲考、信友の假名本末、雅望の雅言集覽、義門の活語指南、友鏡、奈萬之奈、全齋の漢吳音圖、守部の助辭本義考、篤胤の古史本辭經、神字日

文傳等著名なり。

第四期は國語學衰微の時代にして、徳川氏の末世より明治維新後十九年までなり。此間は國歩艱難の時に際し、内外の多事を極め、或は維新後國學者を輕視したるがため、語學は實に微々として振はず、第三期の研究の範圍内に於て僅に其命脈を繋げるのみなりき。鶴峯、戊申が天保二年和蘭文典に倣ひて作れる語學新書の如き、特色あるものは甚だ稀なり。

明治十九年東京帝國大學文科大學に博言學科を置かれて、國語の純粹なる研究の新に開けたるは、これ第五期を劃するものと謂ふべし。第五期の國語研究は大いに従前と趣を

皇紀二五四六
年

皇紀二四九一
年

異にして、研究の基礎として言語學・聲音學・外國語學をはじめ、史學・人類學・心理學・論理學等の補助學を修めて、科學的研究をなし、研究材料は中古の和歌に偏せずして、廣く古今雅俗の歌謠文章・言語に亘り、外國語を輕蔑せずして比較研究の材料とし、以て國語を完全に研究せんとする勢となれり。かくて國字・假名遣・音韻組織・語源・語彙・語法等の研究、漸く新旗幟を認むるに至れり。

國語讀本別記 終

國語讀本別記

定價 金參拾五錢

明治四十二年一月六日發行
 明治四十二年三月二十日訂正印刷
 明治四十二年三月廿三日訂正再版發行

著者

上田萬年

東京市麴町區富士見町壹丁目卅二番地

發行兼印刷者

大日本圖書株式會社

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地

右代表者

專務取締役 宮川保全

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地

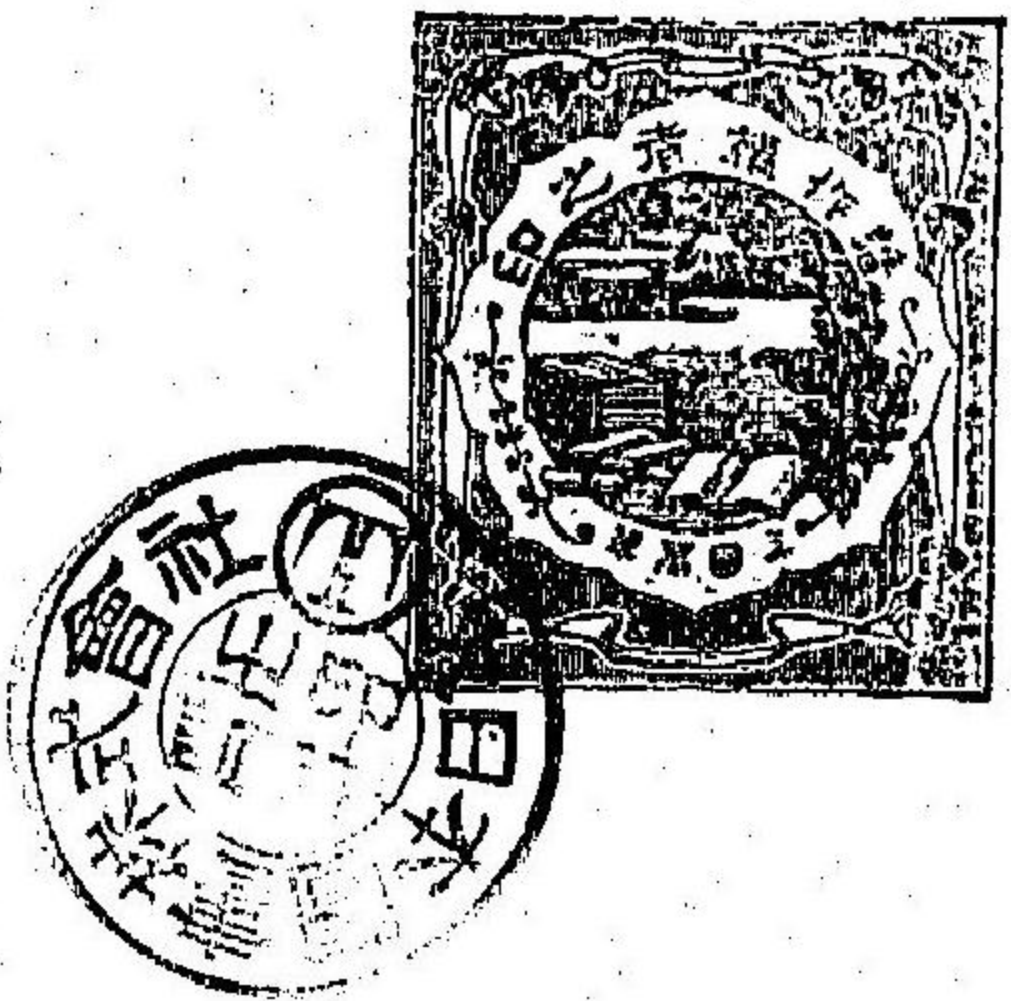
大日本圖書株式會社

大阪市東區北久太郎町四丁目十七番屋敷

大日本圖書株式會社 支社

各府縣下 特約販賣所

發賣所



文學博士 上田萬年先生新著

中學國語讀本 全十冊 定價 各卷 金貳拾五錢

師範國語讀本 全十三冊 定價 各卷 金廿五錢

女子師範國語讀本 全十二冊 定價 各卷 金廿五錢

高等女學校國語讀本 全十冊 定價 各卷 金貳拾五錢

國語讀本別記 全一冊 定價 金參拾五錢

國語 法全三冊 近刊

發行所 大日本圖書株式會社

文學士 岡田正美校閱 大日本圖書株式會社編輯

明治時代文範 全一冊 定價 金六拾五錢

德川時代文範 上卷 定價 金壹圓參拾錢

奈良時代文範 上卷 定價 金參拾錢

關根正直編纂 近體文編 全一冊 定價 金五拾錢

永井一孝著 文學士岡田正美補 國語法楷梯 全一冊 定價 金參拾參錢

文學士 吉岡郷甫著 日本口語法 全一冊 定價 金六拾錢

文學博士 上田萬年校閱 福井久藏著 新日本文典 全四冊 定價 金八拾八錢

福井久藏著 續新日本文典 全一冊 定價 金貳拾七錢

永井一孝著 日本文法史 全一冊 定價 金壹圓五拾錢

文學士 佐々政二編纂 國文法要義 全一冊 定價 金八拾五錢

文學士 保科孝一著 修辭法 全一冊 定價 金八拾錢

文學士 岡田正美著 東京外國語學會藏版 國語學小史 全一冊 定價 金壹圓參拾錢

文學士 笹川種那編 新撰假名遣 全一冊 定價 金拾五錢

文學士 笹川種那編 提要日本文學史 全一冊 定價 金四拾錢

中野秋香編 落窪物語大成 全一冊 定價 金壹圓八拾錢

文學士 佐々木政一著 連俳小史 全一冊 定價 金四拾五錢

土井曉翠著 中村不折畫 東海游子吟 全一冊 定價 金壹圓

松下大三郎 渡邊文雄編 國歌大觀 全二冊 定價 金拾參圓

文學士 藤澤古雪著 帝國文學會藏版 則がらしあ 全一冊 定價 金五拾錢

柳原芳野編纂 文部省出版 文藝類纂 全八冊 定價 金貳圓七拾五錢

文學博士 上田萬年校閱 大川茂雄 文學博士 芳賀矢一校閱 南茂樹共編 國學者傳記集成 全一冊 定價 金四圓

アストン原著 芝野六助譯 日本文學史 全一冊 定價 金貳圓五拾錢

國學院大學編纂 法制論 全一冊 定價 金貳圓參拾錢

續法制論 全一冊 定價 金壹圓六拾錢

國文論 全一冊 定價 金貳圓五拾錢

國文論 全一冊 定價 金貳圓四拾錢

赤柳又次郎撰 帝國文學會藏版 日本文學者年表 第一冊 定價 金七拾錢

文學士 高桑駒吉 文學士 成川容次郎校訂增補 文學士 依田登二郎 校訂 吾妻鏡集解 全三冊 定價 金壹圓七拾錢

增補 吾妻鏡備考 全三冊 定價 金壹圓七拾錢

發行所 大日本圖書株式會社

